

第 I 章 調査に至る経過と調査経過

第 1 節 宇治里尻 36 - 6 他・36 - 27 他の調査

A. 届出書の提出と協議経過

宇治里尻 36 - 6 他 平成 17 年 3 月 31 日付で武田隆久氏より、宇治市街遺跡に該当する里尻 36 - 6 番地他における開発行為に関して、文化財保護法第 93 条の第 1 項の規定により届出があった。開発の概要は、建築面積 18391.28㎡に地上 5 階地下 1 階建ての病院及び地上 4 階地下 1 階建ての特別養護老人ホームを建設しようとするもので、当該計画地の現状は工場地であった。

宇治里尻 36 - 27 他 平成 17 年 5 月 19 日付でユニチカ株式会社代表取締役大西音文氏より、宇治市街遺跡に該当する宇治里尻 36 - 27 番地他における開発行為に関して、文化財保護法第 93 条の第 1 項の規定により届出があった。開発の概要は、敷地面積 2,619㎡に建築面積 2,619㎡の道路構造令に基づく道路を建築しようとするもので、当該計画地の現況は工場地であった。

B. 試掘調査

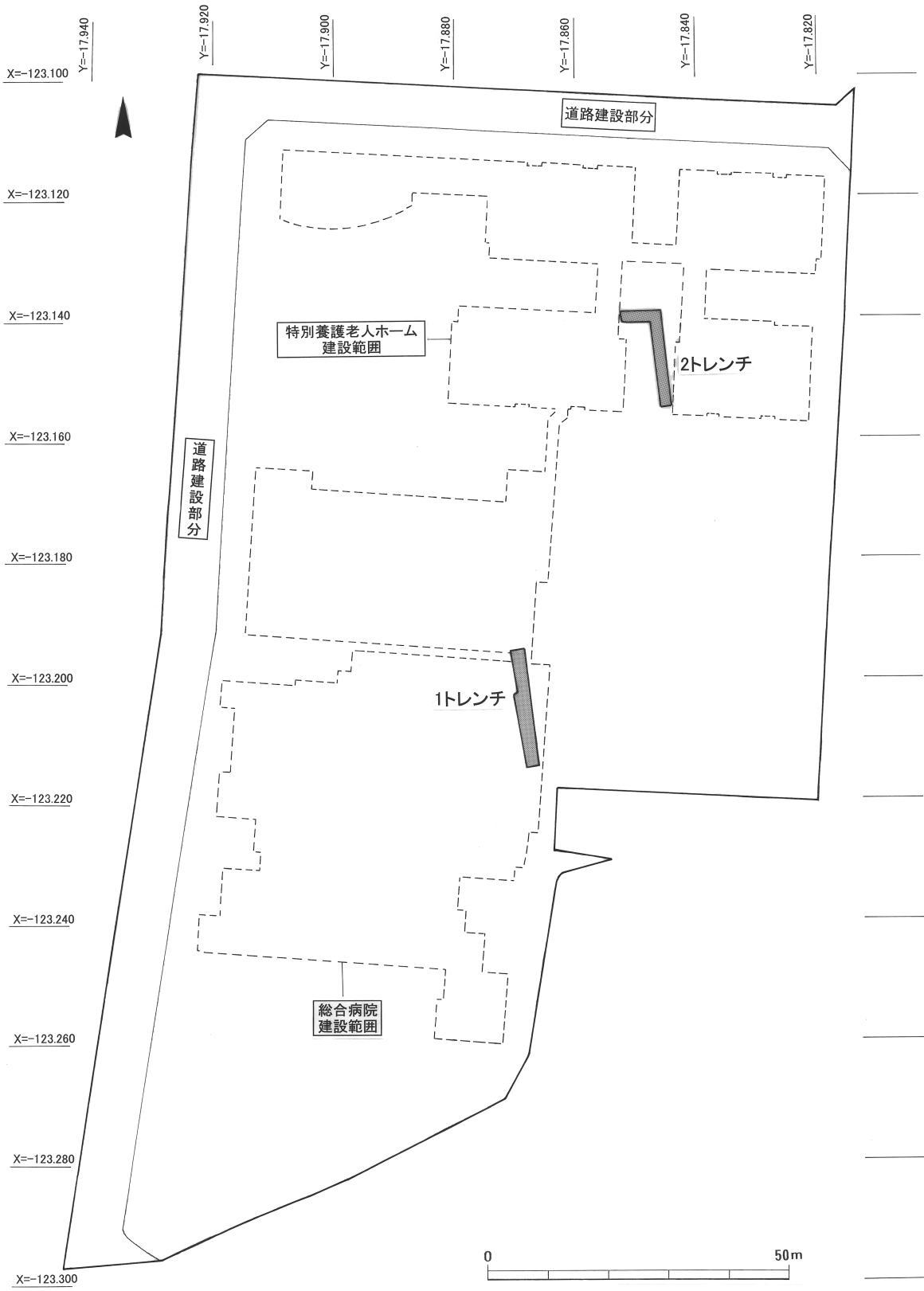
当該地は、宇治市街遺跡の川西地区北端で、かつ巨椋池との境界部分にあたりと考えられ、巨椋池と沿岸集落の関わりやそこでの人々の生活環境の歴史を知る上で重要な場所といえる。建築計画上、掘削行為による遺構や遺物の破壊は免れず、遺跡の詳細を知る点からも発掘調査の必要性を考え、まずは試掘調査によって、遺跡の残存状況や遺構密度などを把握することとした。



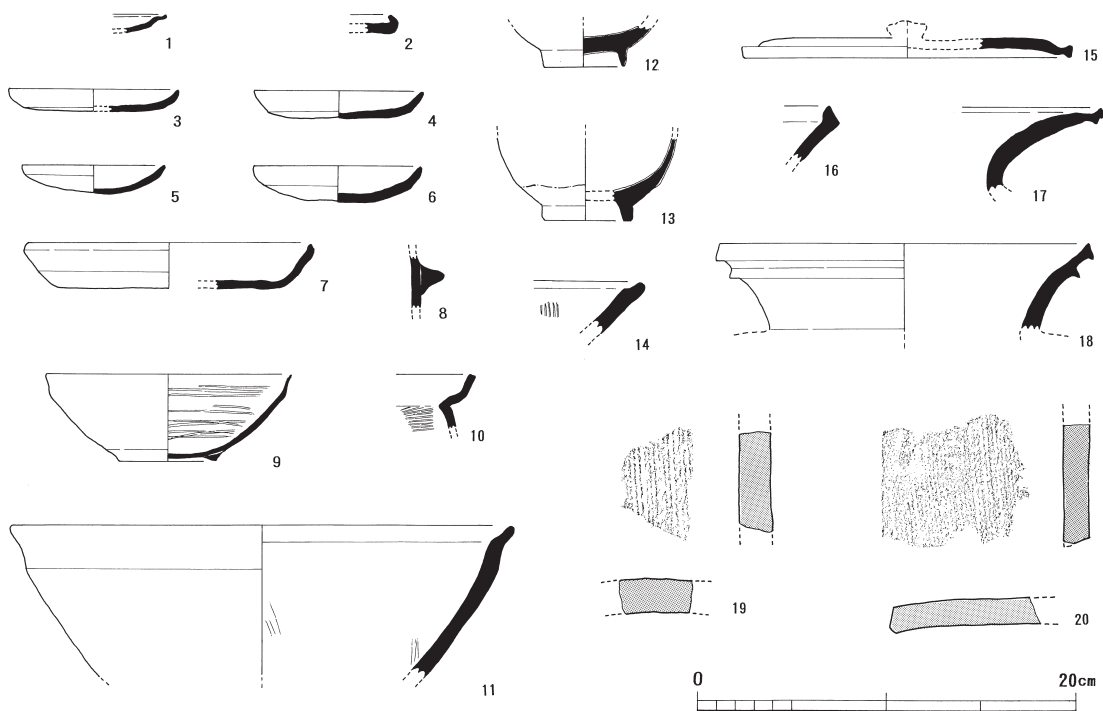
第 1 図 試掘トレンチ (1 トレンチ)



第 2 図 試掘トレンチ (2 トレンチ)



第3図 試掘トレンチ配置図



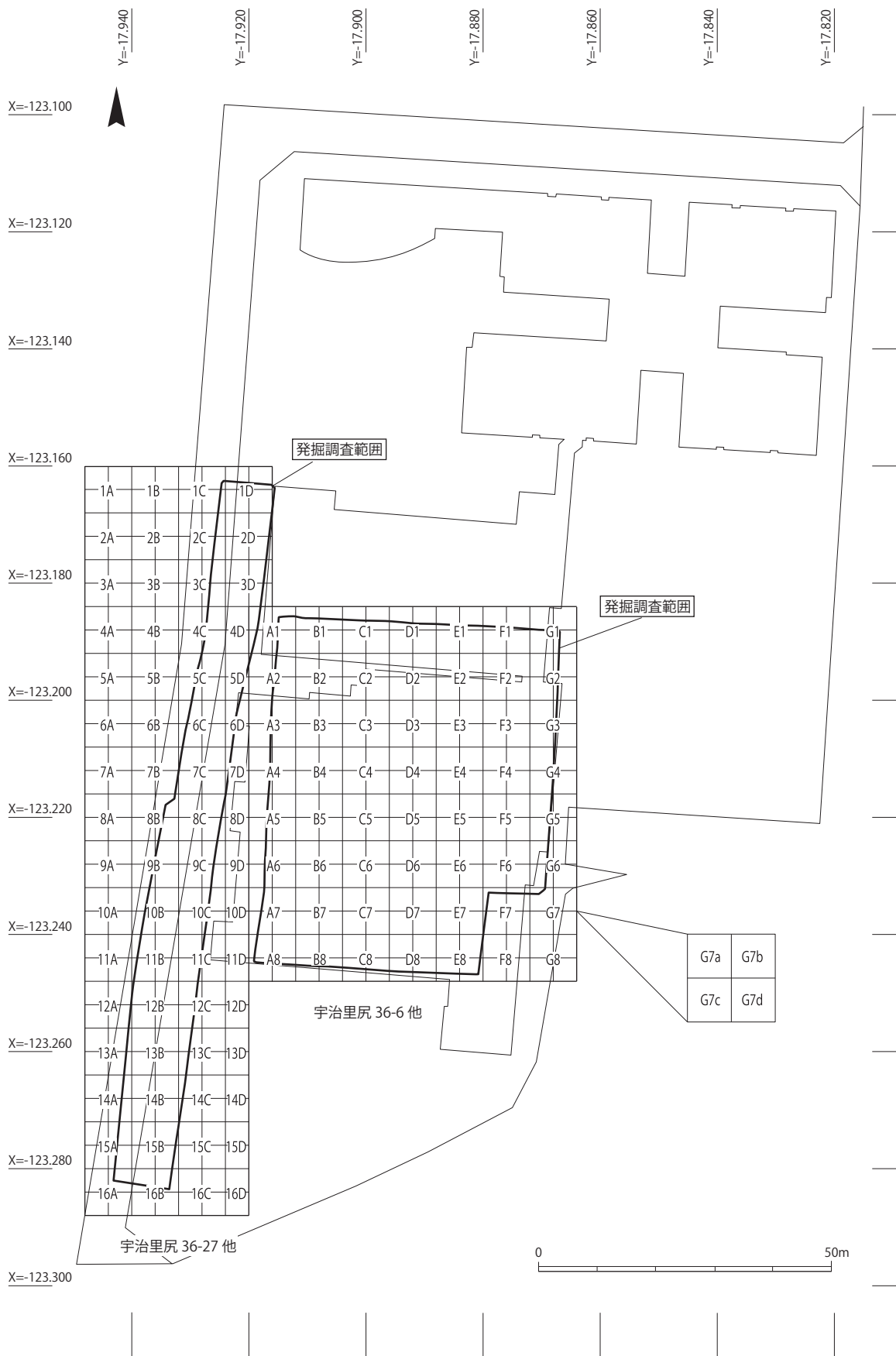
第4図 試掘トレンチ出土遺物（1～14・17；1トレンチ、15・16・18～20；2トレンチ）

試掘調査は、調査トレンチを2か所設け、南側の駐車場に設定したものを1トレンチ、北側の駐車場の隅に設定したものを2トレンチとした。調査面積は計70㎡である。現場作業は、まず重機による表土掘削除去を行い、後の掘削はもっぱら人力で行った。遺構完掘後は、写真撮影や測量による記録作成を行った。調査期間は、平成16年1月20日から同年2月10日までである。

1トレンチ 土層の堆積状況は、概ね4層が確認され、上から工場建設に伴う整地層、次に江戸から明治に至る水田層、その下に遺跡を包括する土壌層が2層認められた。旧工場建物基礎部については、基本的に工場建設時の整地層内でおさまっており、遺跡の破壊している様子は特にうかがえなかった。水田層下の土壌層は、種々の要素から時期差が認められたため、上下2層に区分した。遺構面上で確認した生活痕跡は、上層では南北方向に走る溝や土坑などがあり、下層では柱穴などがあつた。いずれも面積に限界があり、遺跡の展開は判断できなかった。埋没深度は、上層の遺構検出面で地表面下0.4～0.5m、下層の遺構検出面で地表面下0.6～0.7mである。出土遺物は、土師器や須恵器などの土器類や陶磁器類などが多数認められ、時期的には古墳後期・平安後期・室町後期・江戸期の概ね4つに区分できる。中でも平安後期の遺物が最も多い。

2トレンチ 土層の堆積状況は、現地表面から0.9～1.3m下までが、工場建設に伴う整地層で、その下に砂層と青灰色の粘質土層が互層となって堆積している状況が確認された。この互層は自然形成層と判断され、旧宇治川あるいは巨椋池による堆積層の可能性が高い。この互層中からは古墳後期から江戸期にいたる土器片が少量出土するも、明確な生活痕跡が認められなかった。

成果を簡単にまとめると以下のようなになる。



第5図 発掘調査実施範囲図と地区割図

1 トレンチでは、2つの遺構面が確認され、時期は平安時代から室町時代を中心とするものであり、集落の存在が理解できた。2 トレンチでは、明確な遺構を確認することができず、1 トレンチ付近に宇治市街遺跡の北限が想定されるのではないかと理解した。

C. 発掘調査の実施

宇治里尻 36 - 6 他 現地建物の解体・撤去した後に作業を開始することや調査終了後は掘削した状況のまま明け渡すといった開発業者間との申し合せや、発掘調査を開始する旨の通知を地元町内会（里尻町内会・小桜町内会・第三連合町内会）や報道機関に行うなど、発掘調査を開始する前の準備として、それらの作業を行った。

現地の発掘調査は、平成 17 年 6 月 6 日に着手し、文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知についても 6 月 6 日付けで行った。発掘調査面積については当初 3,000㎡を予定していたが、調査を開始したところ計画建物範囲で地盤が弱い箇所があり、調査実施が困難な状況であったため、実効面積は建物北の 2,692㎡で行わざるをえなかった。

発掘調査はまず重機による表土層の除去を行った。表土を除去すると近世期の遺物を含む耕作土層が表れ、それらを除去すると茶褐色の土壌層があらわれた。この土壌層中では遺構の検出は難しいと考え、土壌層を除去して下面調査を行うこととし、重機による掘削はこの土壌層を除去するところまで行った。また、重機掘削中に遺物が集中して検出された箇所が見つかり、その箇所については部分的に残した。その後の作業はもっぱら人力で行った。

遺構及び遺物については、図面及び写真撮影による記録作成を行い、遺物の取り上げは随時行った。また、必要と考えられる土壌のサンプリングも数点採取した。全ての遺構が完掘状態になった段階で、トレンチの土層断面図や平板による平面図等の記録作成を行った。図面による記録作成後は、空撮によるトレンチ全景とデータ上必要な箇所の写真撮影を行った。

現場における一連の作業が終わった段階で、その調査成果を 9 月 20 日に報道発表し、23 日に現地説明会を行った。現地説明会は午前 10 時～午後 3 時まで行われ、調査現地の開放および発掘作業の見学、出土遺物の展示を行った。現地説明会後は、残っていた記録作成等の作業を行い、9 月 27 日をもって現地での作業を終了した。10 月 4 日には発掘調査終了届を京都府に提出した。

宇治里尻 36 - 27 他 現地建物の解体・撤去した後に作業を開始することや調査終了後は掘削した状況のまま明け渡すといった開発業者間との申し合せや、発掘調査を開始する旨の通知を地元町内会（里尻町内会・小桜町内会・第三連合町内会）や報道機関に行うなど、発掘調査を開始する前の準備として、それらの作業を行った。

現地の発掘調査は、平成 17 年 9 月 20 日に着手し、文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知についても 9 月 20 日付けで行った。発掘調査面積については、調査開始後に計画建物範囲で地盤が弱い箇所が見つかり、調査実施が困難な状況になったため、実効面積は建物北の 1,220㎡で行わざるをえなかった。

発掘調査はまず重機による表土層の除去を行った。表土を除去すると茶褐色の土壌層があらわれた。土壌層中に古墳時代から近世までの遺物を含んでいたが、この土壌層中では遺構の検出は難しいと考

え、土壌層を除去して、下の土層面から調査を開始することとし、重機による掘削はこの土壌層を除去するところまで行った。その後の作業はもっぱら人力で行った。

遺構及び遺物については図面及び写真撮影による記録作成を行い、遺物の取り上げは随時行った。また、必要と考えられる土壌のサンプリングも数点採取した。全ての遺構が完掘状態になった段階で、トレンチの土層断面図や平板による遺構平面図等の記録作成を行った。図面による記録作成後は、空撮によるトレンチ全景とデータ上必要な箇所の写真撮影を行った。

現場における一連の作業が終わった段階で、その調査成果を報道発表し、12月2日をもって現地での発掘調査を終了した。12月2日には発掘調査終了届を京都府に提出した。

D. 出土品の措置

宇治里尻 36 - 6 他 発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状況でコンテナバット 150 箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。遺失物法に基づく埋蔵物発見届は 9 月 27 日付けで宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管証も同日付けで提出した。これら出土遺物については 12 月 4 日付けで文化財認定された。

宇治里尻 36 - 27 他 発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状況でコンテナバット 30 箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。遺失物法に基づく埋蔵物発見届は 12 月 1 日付けで宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管証も同日付けで提出した。これら出土遺物については平成 18 年 1 月 10 日付けで文化財認定された。

E. 発掘調査終了後の措置

発掘調査終了後は事前の協議に基づき掘削状況のまま、開発業者と現地で引き渡しの手続きを行った。建造物が地下を持つことから遺構は完全に除去されることとなり、最終的に遺構に関しては、現況保存は行われず、記録保存という形となった。

F. 発掘調査報告書の作成・刊行等

整理作業と発掘調査報告書の作成は、宇治市歴史資料館が直営で行った。整理作業にあたっては、遺跡・遺構の時期や特徴の判定に関わる遺物、あるいは遺存度が高く時代的特徴を示す遺物で、報告書作成にあたって必要かつ重要な遺物 (A) と、遺存度が低く分析対象としては情報量が少ないため今回の整理では特に必要としないもの (B) とに分別した。

この発掘調査で作成した記録類及び出土品については、宇治市歴史資料館で収蔵し公開している。

第 2 節 発掘調査の実施方法

A. 発掘調査の実施主体

宇治里尻 36 - 6 他 本件発掘調査は、武田隆久氏の依頼に基づいて宇治市教育委員会が実施したものであり、宇治市歴史資料館が実務を担当した。

宇治里尻 36 - 27 他 本件発掘調査は、ユニチカ株式会社代表取締役大西音文氏の依頼に基づいて宇治市教育委員会が実施したものであり、宇治市歴史資料館が実務を担当した。

B. 発掘作業の実施方法

宇治里尻 36 - 6 他 現地の発掘調査については宇治市歴史資料館が直接担当し、発掘調査の土砂排除作業や記録作成作業など、発掘調査に必要な標準作業及び作業の運営管理全般を、競争入札で落札した専門業者に委託した。発掘作業は発掘担当職員の指示監督の下、委託業者が組織した技術員 1 名、作業長 1 名、作業員 16 名程の人員体制で行った。

宇治里尻 36 - 27 他 現地の発掘調査については宇治市歴史資料館が直接担当し、発掘調査の土砂除去作業や記録作成作業など、発掘調査に必要な標準作業及び作業の運営管理全般を、競争入札で落札した専門業者に委託した。発掘作業は発掘担当職員の指示監督の下、委託業者が組織した技術員 1 名、作業長 1 名、作業員 10 名程の人員体制で行った。

C. 発掘調査体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

発掘調査主体者：宇治市教育委員会

発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 石田 肇

専門指導：宇治市文化財保護委員会 委員長 上原真人（京都大学大学院教授）

発掘調査事務局：宇治市歴史資料館

歴史資料館館長 吉水利明

文化財保護係 係長 杉本 宏

歴史資料係 主事 久保 俊

発掘担当者：歴史資料館文化財保護係 主査 荒川 史

主事 浜中邦弘

嘱託職員 西田倫子

参加者：浅井猛宏・伊藤亜紀子・大原瞳・大坪州一郎・表原勝代・川端玲子・北澤英子・木村理恵・桐山秀穂・久保千恵子・田中元浩・棚田祐子・三森文絵・宮林愛加・桃井宏和・山村沙奈美

（協力者）

本発掘調査の実施にあたっては、次の方々からご協力・ご教示いただいた。記して感謝したい。

順不同・敬称略。

浅野啓介・石川ゆずは・五十川伸矢・井上智博・上原真人・魚津知克・宇佐見守・小澤一弘・尾野善裕・柏田有香・金原正明・金原正子・菊井佳弥・桐山秀穂・小泉裕司・近藤真人・酒井清治・櫻井久之・新名 勉・鋤柄俊夫・大洞真白・壇原 徹・中世土器研究会・中井淳史・永井正浩・永井晃子・中川要之助・中原 計・永友朋子・中塚 良・中野 咲・橋本清一・馬場 基・藤沢良祐・正岡大実・増渕 徹・松田順一郎・宮路淳子・光谷拓実・山本 崇・山本雅和・米田敏之・渡辺晃弘・里尻町内会・小桜町内会・第三連合町内会

第Ⅱ章 宇治市街遺跡の歴史的環境

A. 宇治市街遺跡（川西地区）の環境（図面図版1・2、第6図）

宇治市街遺跡は、現在の中宇治地区とほぼ重複する古墳時代から近世にかけての集落遺跡である。現在、周知の埋蔵文化財包蔵地として認定している範囲は、宇治川を挟んで東西に1,500 mほど、南北に500 mほどであり、面積54万㎡を測る宇治市最大の遺跡である。遺跡としては川東を川東地区、川西を川西地区に区分する。

川東地区に宇治上神社、川西地区に平等院（藤原頼通が永承7年（1052）に創立）、平安期王朝文化を代表する建造物が存在する。今回の発掘調査地は後者のエリアに該当する。

史料によれば平安前期よりすでに別業が存在し、そのうちの 하나가幾人かの手を経て、藤原道長に伝領（宇治別業）され、その後藤原頼通によって寺院化、平等院へと結実する。その後、平等院には頼通一門により数多くの堂塔が造営され、同時に別業も築造されていった。中世期には一定程度の町屋が成立、また幾度も戦乱の地となる。近世初頭には茶師の繁栄とともに発展を遂げたものと思われる。

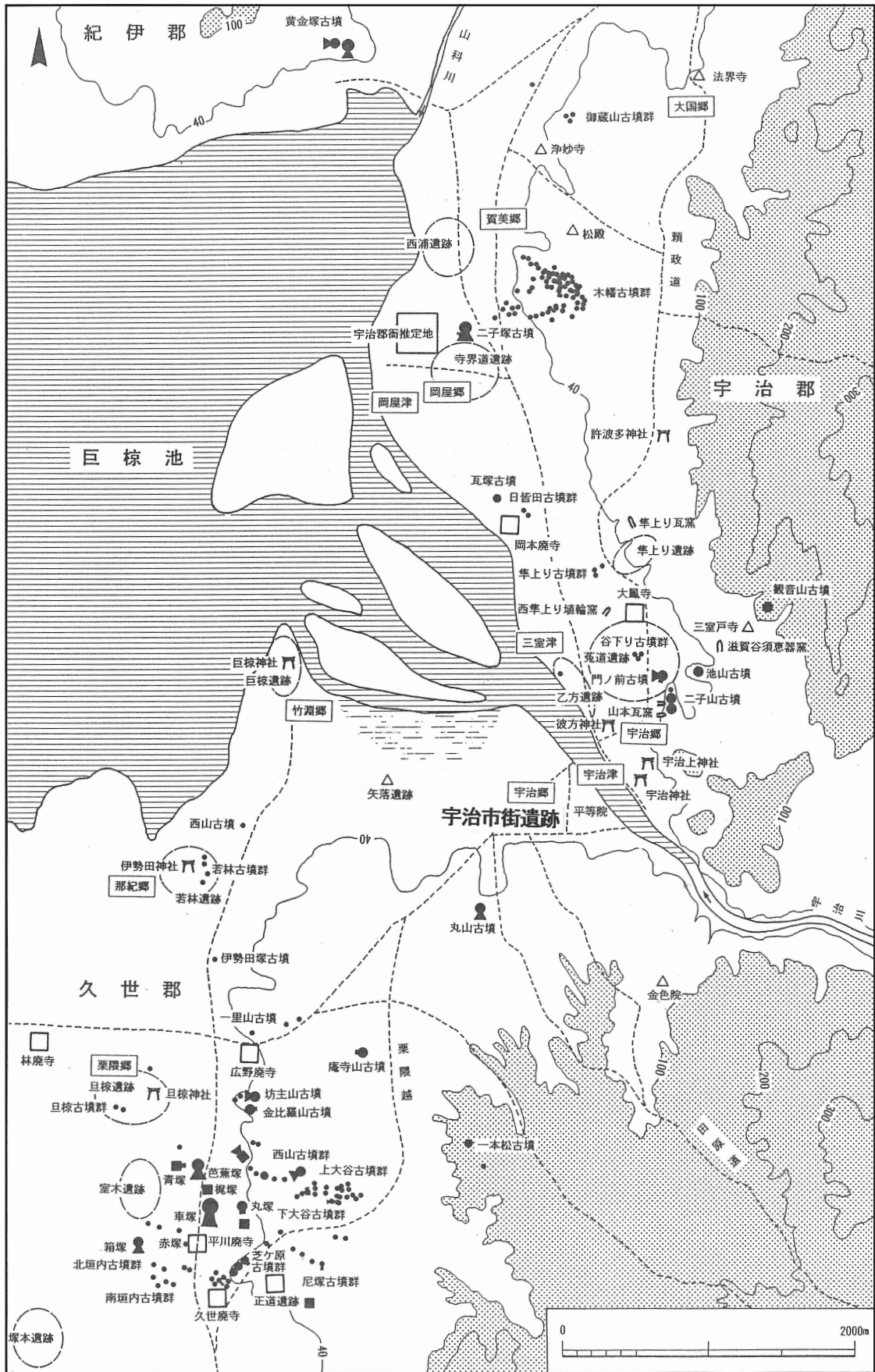
当該地の地形は、南側の丘陵から流下する折居川や塔ノ川などの小河川が形成した扇状地と宇治川が形成した河岸段丘とが複合したもので、その基盤となる土層（黄色砂層・砂礫層）の形成は、縄文後期以前とされる。当該地の最も広い範囲で沖積作用を及ぼした折居川の扇状地形成の終息は、古墳中期以降終末期までの間と考えられている。

B. 宇治市街遺跡（川西地区）にみる平安時代

今回調査地を含む宇治市街遺跡（川西地区）ではこれまで本発掘・試掘調査等を含めると計25回程の発掘調査を実施しているが、平安時代に関する遺構・遺物の出土例は決して多くはない。いずれも調査面積が狭く、調査地ごとの遺構認識は点的理解というのが現状である。しかしながら、12世紀（院政期）における景観のアウトラインは、現在一つの有力な解釈を得つつある。

JR宇治駅北の発掘調査（平成10年度）で、12世紀の東西道路側溝が確認された事が契機となってみえてきた。詳細な説明は省略するが、12世紀の平等院西方（別業地区）には、碁盤目状の地割に基づく都市設計が施工されていた。宇治妙楽55番地の調査でもこれに続く東西道路の存在がうかがえ、より具体的となった。施工開始の時期については11世紀後半とされ、藤原摂関家主導によりなされたことは間違いのないであろう。遺物には平等院康和3年（1101）の藤原忠実沙汰によって使用された河内向山系瓦の存在がある。この瓦は藤原摂関家との強い関係を示すものと考えられ、宇治市街遺跡（川西地区）では概ね4町程度の広がりで見出される。

平等院創立前の状況は依然として判然としないが、前述の妙楽55番地の調査で平安前期の園池が確認された。実態として不明であった当該期の宇治を知る上で重要な手がかりが得られた。



第6図 主要遺跡と古代の地形想定図

第Ⅲ章 検出遺構

第1節 基本層序

今回は、調査の関係上調査区が別になったが実際は宇治里尻 36 - 6 他・宇治里尻 36 - 27 他は隣接する遺跡であるため、基本層序については同一の物として理解し、宇治里尻 36 - 27 他については断面（図面図版 10）を掲載することとした。基本的に層序は水平堆積である。

地表より 0.5～0.7m は表土である。表土を除くと調査区南側では平安時代の遺物を大量に含む 0.2～0.3m 程の層を検出した。その層を掘削すると、遺構検出面となる。調査区北側では表土より下には、近世以降の耕作土と考えられる層が 0.5m 程存在する。この層を掘削すると、遺構検出面となる。遺構面直下には礫を多く含む層が出現し河川による堆積が想定された。

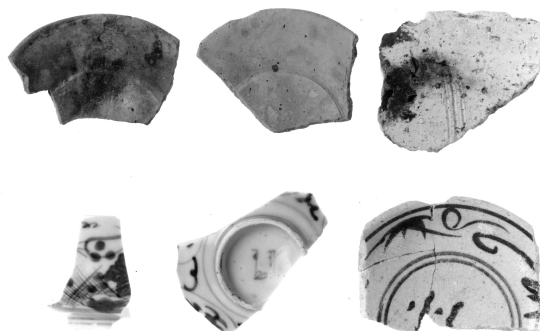
また、今回調査面より下層の確認を行った。下層について火山灰分析を行った結果、黒ボク層と考えられる層が見つかった。詳細については付載 1 にて掲載する。

第2節 主要遺構説明

今回の調査で、調査面ごとに検出した主な遺構を以下に記していきたい。今回は調査体制の状況により基本 1 面での調査を行うこととし、部分的に 2 面調査とした。また、面については土壌等の形成に関わる単位での面調査ではなく作業手順の上での面調査となった。また、調査の関係上調査区が異なる名前となったが、隣接するため同一遺跡とし、遺構についてはあわせて報告することとした。

調査上面 主に近世の遺構を中心に検出した。近世は、調査区中心の東西溝を中心に、北側は耕作地としての利用が想定され、南側についても一部を除いては耕作地の利用が考えられる。

SD1381・SD2001（図面図版 5、写真図版 3・4）この遺構は通称「井川」と呼ばれ、『宇治市史』によるとこの溝は、当初平等院付近の宇治川左岸から取り水し、宇治蓮華・妙楽・里尻を経て、戸ノ内地区においてユニチカ宇治工場の外周に沿って西流し、府道宇治小倉停車場線にほぼ並行して、途中折居川の水を合して小倉町に入り、府道から分離して南西に向かい、旧小倉池南岸にあたる伊勢田町遊田地内に至っているという。巨椋池を湛えていたころは、その付近で巨椋池に流入していたと考えられる。その間、ユニチカ宇治工場付近において、もとの水路が工場敷地内を通過することになった関係から流れを変えたが、おおむね古来のままであると考えられる。今回見つかったこの遺構は、『宇治市史』に記載される井川にあたると思われる。この溝から出土する遺物としては第 7 図があ



第 7 図 SD1381・SD2001 出土遺物

り、この時期に溝が存在したことを示している。

SK1120・SK1090・SK1121・SK2323（図面図版5、写真図版4）この遺構は近年宇治市街遺跡でよくみつかっている。

遺構掘方の中は竹で桶状に円形を作っている。SK1120では、底部に2本の板が敷かれていた。これらの遺構は、耕作地内に位置することから、耕作に伴って使用されていたものと考えられる。SK1120・1090・1121はSD1381に沿って作られていること、耕作地にあること等から水溜めのようなものである可能性もあるが、ベースが砂であるため、竹で組んだだけでは水が通り抜ける可能性が考えられ、用途については今後の課題となった。

SD2002・SD2006（図面図版5）これらの溝は、SD2001に向けて流れ込む溝である。宇治里尻36-6他においても同一の溝がみられた。これらの遺構は埋土に有田焼染付け皿などを伴うことからSD2001いわゆる井川が機能していたのと同時期に存在していたものと考えられる。これらの溝は、町屋に付随する排水溝とも考えられる。

調査下面 主に中世までの遺構を中心に検出した。遺構としては、古墳時代から鎌倉時代までの遺構が同一面上で確認されたが、中心となるのは平安時代の遺構である。また、今回の調査の大きな成果の一つに古墳時代中期の溝がある。これらの遺構を中心として以下説明を行う。

SD1379・SD2152（図面図版6）この溝は宇治里尻36-6他から宇治里尻36-27他へ及ぶ東西方向に走る溝である。宇治里尻36-6他では調査の手順上完掘は困難であったため南側の肩を一部掘削するにとどまった。しかし、宇治里尻36-27他では南北の肩を検出することができた。溝の規模は幅約5m程である。また、北側肩部には杭が打ち込まれ、杭の間に木を渡している状態が検出された。護岸の働きをしていたのではないかと推測される（写真図版12の2）。この溝の廃絶時期は、出土遺物から13世紀には完全に埋められていたと考えられる。また、この溝では、溝の底部で埋土の堆積物流が観察でき、地震の影響を見ることができた。この点については断面の壁のサンプリングを行い、分析を行ったため、詳細は付載2にて報告する。

SD1380・SD2150・SD2151（図面図版6、写真図版5）この溝も調査区を東西に走る溝である。宇治里尻36-6他においては、北肩部断割により北側に2時期に石敷きが施されていたことが分かった。また、この溝の石敷きについては、2時期とも1m×1mのサンプリングを3箇所で行いその構成石材分析を行った。詳細は付載6にて報告する。廃絶時期は、12世紀後半頃と考えられる。溝の埋まる過程は大変複雑である。この事は、この溝の埋土に含まれる遺物の時期差を見てもよく分かるが、なにより溝の堆積状況に顕著に現れている。

SK1382・SK1383（図面図版7、写真図版6）これらの土坑は、SD1380の南肩部に掘削されたものと考えられる遺構である。いずれも、北側はSD1380と重複し、南側は井川に切られることから輪郭ははっきりと検出できなかった。

SK1382は、西側の輪郭しか確認できていない。この遺構からは、穿孔をほどこされた骨が出土している。SK1383は、5m×4mのなかに30～50cmの礫が集中している部分を検出した。これらは、粒度が均一であることから、自然堆積は考えられず何らかの意図があって人工的に運び込まれたこと

が考えられる。この土坑は深さ約 1m 掘削されており、下層を形成する礫層に達している。最下層で古墳時代の遺物が完形で検出されており、下層の流路の遺物が混入している可能性がある。遺構の年代は 12 世紀中頃と考えられる。なお下層流路については、部分的な調査にとどまり、全容を把握できていない。

SE1368 (図面図版 7、写真図版 7) 大変残りの良い木組みの井戸である。一辺 1.2m 四方の大型のもので、縦木は二重にはられている。使用木材は大変しっかりと残っており、木材の形状がそろっていることから、この井戸作成のために加工された可能性が高いと考えられる。根拠の一つとして挙げられるのは、縦木につけられた 4 本の墨線である。これは、組み立ての段階で適当に木材を使用したのではなく、地上にある段階で、すでにどこにどの木材を組むかということなどを決定し、組み立てておいてから据付けたと考えられる。この井戸は水溜を持たない。

SE1225 (図面図版 7、写真図版 8) この井戸は、木組みの部分は除かれており、下の水溜部分のみの検出となった。水溜部分の上には木組みの最下部の横木が残り、水溜部分は大小の曲物で作られていた。水溜部分の最下層から土師質の羽釜 (345) と瓦器 (346)、土師皿 (339) がまとめて出土した。

SK1385・SK1365 (図面図版 6、写真図版 8) SK1385 は直径約 1m の土坑で、土師皿で埋まっており、土器廃棄土坑と考えられる。完形品に近いものも廃棄されていた。SK1365 は、SK1385 程度遺物を含まないまでも同様に土師皿の破片を含む土により埋められていた。

SK1358 (図面図版 7) この遺構は、性格がはっきりしていないが、土器が一括で検出された。遺構としては、浅く落ち込みに捨てられた土器が落ち着いた可能性も考えられる。ただし、いずれの土器も摩滅した痕跡はほとんど見られず、完全な形で 9 点出土している。

P1002 (図面図版 6、写真図版 9) この遺構は、土器埋納ピットである。完形に近い土師皿 21 枚、土師皿の破片数点、瓦器 1 枚が出土した。土師皿はいずれも重ねられ大皿 (261) と瓦器碗 (275) が蓋をするように、ふせられた状態で出土した。

SD2030 (図面図版 6) 平均幅約 1m の溝である。この溝の埋土には大量の土器を含み、その量はコンテナ 3 箱にも及んだ。近世の溝が同一箇所を走っていることから、近世の遺物の混入も見られたが、平安の土器の出土量および遺物の残りのよさと比較して、近世遺物が数点であり、いずれも破片の出土のため混入とみなし、埋土出土の遺物から 12 世紀後半に埋められた溝と理解した。この溝より出土した遺物はどれも残りがよく、完形品も数点見られることから、この溝の廃絶の際、土器の廃棄場として利用された可能性が高いと考えられる。

SE2032 (図面図版 9、写真図版 13) 掘方は直径約 1m、一辺約 0.4m の木組みの井戸枠を持つ井戸である。この木組みの井戸枠には一辺で蔀戸が使われており、転用であるが平安時代の蔀戸の出土例はほとんどなく、大変貴重な資料となった。

SE2041・SE2033 (図面図版 6・9、写真図版 15・16) SE2041 が SE2033 を切っており、新しい井戸と考えられる。SE2033 は、井戸枠などは検出できなかったが、掘方を検出し、断面の状況から井戸と位置づけた。一方 SE2041 はかなり小型で掘方は径約 0.9m、井戸枠が一辺約 0.4m である。

SE2034 (図面図版 9、写真図版 14) この井戸は、南側が削平されており、掘方のラインは北・西・東側の検出となった。井戸枠は木組みで一辺約 1m の大型の井戸である。水溜は確認できなかった。

SE2195 (図面図版 9、写真図版 14・15) この井戸は上部が直径約 1m の石組みである。水溜を持つ。水溜部からは、台付き土師皿の台部が出土している。遺構の時期としては掘方から土器が出土しておらず井戸が掘られた時期ははっきりしないが、12 世紀中頃に機能していたと考えられる。

SK2393 (図面図版 6、写真図版 16) この土坑は完掘に至っておらず、遺構の性格ははっきりしないが、土器がまとまって出土したため、記載する。一辺約 1m の土坑である。出土遺物は、土師皿が完形のもので 10 点、その他完形の瓦器碗と白磁の底部が出土している。

SD2330・SD2340・SD2360・SD2371・SD2392 (図面図版 8、写真図版 17) これらの溝は、調査手順上、複数の遺構番号を持つが、いずれも同一遺構である。以下 SD2330 と記載する。この溝 SD2330 は、幅 2 m で南北方向に流れるものである。SD2330 は、調査の状況から、人口の溝であるか自然の流路であるかははっきりとしていないが、形態から考えると、自然のものである可能性が極めて高いと考えられる。また、図面にある SD2350 は近世の石組み溝と考えられ、1 点この溝から出土した土器を掲載しているが、この土器は SD2350 の時期を直接示すものではなく下の流路からの混入と考えられる。

第IV章 出土遺物

第1節 出土遺物の概要

宇治里尻 36 - 6 他及び宇治里尻 36 - 27 他出土遺物について、以下まとめる。今回の調査では、コンテナバット 180 箱分におよぶ遺物が出土した。古墳時代の土師器、須恵器、木製品などから古代・中世の土器・陶磁器、近世の陶磁器など多彩であるが、紙幅の都合から、ここではもっとも多く出土した平安時代後期の遺物を報告する。土器・陶磁器ごとの傾向を概述したあと、良好な一括資料である P1002・SK1358・SK1365・SK1385 出土遺物を報告し、最後に全体の特徴や評価について述べる。遺物の個別情報については巻末の遺物観察表（表 1・2）を参照されたい。古墳時代の一括遺物（SD2330 出土）は第 2 節で報告する。

A. 遺物の出土傾向（図面図版 11～20）

土師器皿（手づくね成形） 皿が中心であるが、これらは製作技術や器形から、京都産土師器を正確に模倣したもの（以下、京都系土師器とよぶ）と、そうでないものの 2 種類に大きく区分される。前者は口縁部形態に特徴があり、口縁端部が外側に平たく折り曲がり側面観が「て」字状をなすもの（「て」字状口縁）、口縁部を時計回りに 2 周ナデたもの（2 段ナデ口縁）、ナデを 1 周施したのち、指や工具で口縁端部をとがらせるように傾斜をつけたもの（1 段ナデ面取り口縁）、1 周のナデのみを施したもの（1 段ナデ口縁）、きわめて扁平な器形で、口縁端部を内側に短く折り返したものの（コースター状皿）の 5 種類がある。後者は形状にばらつきがあるが、概して扁平で体部が短く、内外面のナデ調整はやや不明瞭である。15-252・253、19-127・141 は体部がやや内湾し、器高が 4cm 前後を測る身の深いタイプである。共伴の遺物から判断するかぎり 12 世紀代と思われるが、同時期の宇治市内遺跡群では類例がない。

このほか特殊な器形として、台付皿がある（12-71、15-324、17-48、18-87・88、19-113・124）。粘土帯をまるめて成形した高さ 3cm 前後の高台を貼り付けたものである。宇治市街遺跡をはじめ、南山城地域ではしばしばみられる器形である。

京都系土師器の組成に注目すると、2 段ナデ口縁や 1 段ナデ面取り口縁がもっとも多く出土した一方、宇治市地域では 12 世紀後半より出現し、13 世紀に盛行する 1 段ナデ口縁の皿は少ない。これは 1 段ナデ面取り口縁と共伴する例が多いこと、後述するように共伴する瓦器碗の年代がおおむね 12 世紀代におさまることから判断すれば、土師器の中心的な年代は 11 世紀後半から 12 世紀代と考えられる。

土師器皿（ロクロ成形） 図示したのは 25 点であるが（11-46、13-148～150、16-348～353、18-84～86、19-143・144、20-153～162）、図化できなかったものも含めると出土点数は多い。宇治市内遺跡群ではきわめて特異な出土量である。底部はすべて糸切りであるが、柱状高台に近い形状のもの（16-348、20-158・160 など）、体部が極端に短く扁平なタイプ（18-84～86、20-153・154・159）、深身で杯状になるとと思われるもの（13-149、19-143・144）など、器形はさまざま

ある。胎土の質もまちまちであり、複数の生産地からもたらされたことを推測させる。糸切り底の口クロ成形土師器は備前～備後周辺をのぞくほとんどの地域で生産されているために産地は特定できないが、おそらく西日本からの製品と想像される。13-147、16-347は洛北栗栖野で生産されたと考えられる皿で、京都市内遺跡（平安京）でもしばしば出土する。短めの直線的な体部をもち、糸切り底がベタ高台状を呈する。胎土は精良で、灰白色である。

図示できなかった資料のなかには、ヘラ切り底で高台をもつ碗や、糸切り底に高台を貼りつけた碗の破片があった。前者は吉備系、後者は防長地域の土師質土器碗と推測される。

土師器 皿以外の器種では、高杯や鉢が出土した。高杯は長さ13cm前後を測る円筒形で中空の軸をもつ（17-7、13-130など）。軸の表面は面取りされ、灰白色で精良な胎土でつくられている。鉢は口縁端部の形状が異なるものの、粘土紐を带状にまきあげ、接合痕をのこしながら仕上げる（12-102、17-51）。17-51は体部外面に条線がみられるものの、断面を観察するかぎりでは粘土の接合状況と一致しておらず、成形後に線描で「接合痕」風に加えられた特異な事例である。いずれも共伴遺物からみて、11世紀末～12世紀代の所産であろう。高杯や鉢は京都市内遺跡（平安京）以外では出土例がきわめて少ないので、本資料は大変めずらしい事例といえる。

黒色土器・瓦器 黒色土器碗はSD1380などで数点確認できた。11-49・51は黒色土器A類碗、11-50・52はB類碗である。前者は高台をもち、10世紀前半ごろと考えられる。後者は52など瓦器碗と共通する形態的特徴を有する点から判断すれば、おおむね11世紀代に位置づけられよう。瓦器碗は大和型・楠葉型の2種類がある。大和型は第I段階C型式～第III段階A型式、楠葉型はI-3期～III-1期のものがほとんどで、11世紀後半から12世紀代と考えられる。13世紀以降にくだる資料はほぼ皆無であった。

須恵器 12-68・18-98は腰部の張り出しが小さく、直線的に体部がたちあがるタイプと推定される東播系の鉢で、11世紀末ごろ。11-28・29、12-67・110は丹波篠窯産鉢。11-28は内向きに折り曲げて玉縁状口縁をつくるタイプ。12-67・110は逆に外側へ折り曲げてつくるタイプである。西長尾5号窯の製品で、10世紀末～11世紀初頭ごろと考えられる。12-77は口縁端部が外側に屈曲して段をなす讃岐十瓶山窯産の鉢。11世紀後半ごろであろう。南山城では椋ノ木遺跡で12世紀後半の甕が出土しているが、概して出土例は少なく、しかもこの時期の例はめずらしい。

緑釉陶器 碗の底部片が数点出土した（11-53・58、12-80、16-371）。釉調は濃緑色で、素地は精良な粘土を用いて酸化炎焼成したものが多い。近江産。高台の形状からみるならば、10世紀後半から11世紀ごろと思われる。16-372は壺か瓶の底部であろう。

灰釉陶器・山茶碗 図示し得なかった破片も含めれば、72点におよぶ灰釉陶器・山茶碗が出土した。宇治市内遺跡群では群を抜いて多く、南山城地域をみわたしても特異な出土量をしめす。白川金色院跡で山茶碗の小皿が出土した程度で、出土例はきわめて少ない。皿・段皿・碗などの供膳具がおよそ9割を占めたが、片口鉢（13-160）や壺類の底部などもあった（13-120）。灰釉陶器はO53窯式～百代寺窯式のもものが中心で、10世紀前半～11世紀前半。16-366はK90窯式2ないし3型式の段皿で、9世紀後半。山茶碗は大小の碗が出土した。高台が断面逆三角形形状を呈し、靱殻痕をのこ

すこと、高台を焼失した小皿がみあたらないことから、第4型式のものと考えられる。12世紀後半代。いずれも胎土が精良で緻密なことから、東濃産と考えられる。なお、図示しなかった資料のなかに、1、2点ほど胎土の粗い尾張産（南部系）の山茶碗の小碗があった。

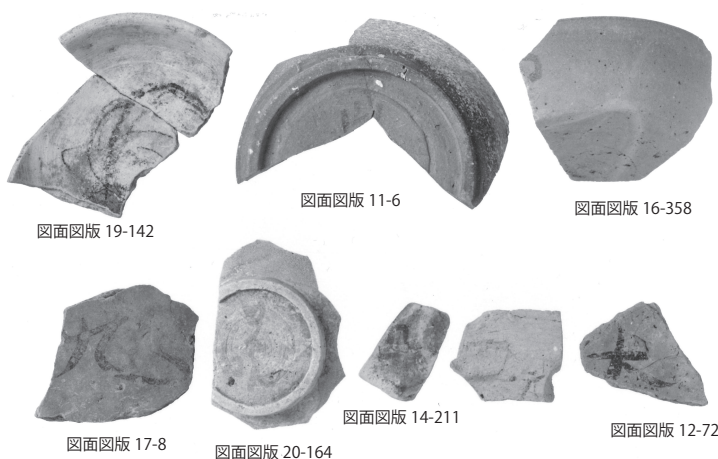
輸入陶磁器 玉縁口縁の白磁IV類碗が多く、青磁はごくわずかであった。12-86は白磁水注もしくは壺の底部。全形は不明であるが、釉や胎土の質感、底部の形態は平安京左京二条二坊（高陽院跡）SG1-A出土の白磁壺に似る。きわめてめずらしい資料である。

煮炊具 土師質土器羽釜や石鍋（16-375～379、20-169）が確認された。前者のなかで比較的古く位置づけられるのが11-47・48や18-92・93のような寸胴型で口縁端部に太く短い鑊をめぐらせるタイプで、いわゆる摂津C型と呼称される一群である。11世紀はこのタイプがほとんどであるが、12世紀以降になると16-345や18-91など口縁端部が「く」字状に屈曲し、胴部が大きく内湾する大和型の羽釜が主体となる。

瓦 右三巴文軒丸瓦（13-161、16-383）、均整唐草文軒平瓦（16-384・385、20-177・178）、連巴文軒平瓦（16-386）などがある。13-161・16-383は内区の珠文がまばらなタイプで、平等院出土軒丸瓦NM048型式と同文。16-384・385はともに中心飾が雪だるま型をなす。平等院出土軒平瓦NH049型式と同文である。16-386は平等院出土軒平瓦NH063型式と同文である。平安時代後期のもので、軒平瓦は河内向山瓦窯の製品であろう。このほか単弁蓮華文軒丸瓦（16-382）が1点出土しているが、これは時期がさかのぼる資料である。

墨書土器（第8図） 11-6・16-358は須恵器杯、20-164は白磁碗で、ほかはすべて土師器皿である。判読可能なものは3点で、14-211は底部外面に「国口」、17-8は底部外面に「九」、12-72は底部外面に「大」が墨書されている。19-142は2段ナデ口縁をもつ1代の土師器皿で、見込み部分に消し炭のようなもので渦状の文様を描く。

その他 13-133は甕。体部外面にカキ目を施し、内面は青海波文の当て具痕がのこるなど、調整手法は須恵器と同一であるが、瓦質に焼き上げられている。近畿地方では類例を知らず、年代的な位置づけを与えがたい。



第8図 墨書土器

B. 一括遺物資料

SK1365（14-192～215） 192～211は土師器皿。192～194はコースター形の皿。197～203・206・207・209は京都系土師器である。209は1段ナデ面取り口縁をもつが、器高の深いやや特殊な器形である。212・213は瓦器碗。213は大和型で、外面のヘラミガキがまばらな点からみて第III型式A段階に位置づけられる。

214 は白磁 IV 類碗、215 は白磁皿 VI 類である。京都系土師器は 1 段ナデ面取り口縁の大小皿（197・198～200・206・207・209）、2 段ナデ口縁の大皿（201～203）を中心に、コースター形の皿がともなう構成から判断して、12 世紀後半～末あたりに位置づけられよう。白磁はやや古くなるが、瓦器碗の年代とは矛盾するものではない。

SK1385 (14-216～244) 216～243 は土師器皿。216・217 はコースター形の皿。221～230・234・236・238～242 は京都系土師器である。量的に主体となるのは 1 段ナデ面取り口縁の大小皿（221・222・227・229・234・239～241）で、ついで 2 段ナデ口縁（223～226・228・230）の大小皿、1 段ナデ口縁の大小皿（236・238・242）は少ない。この組成をみると、SK1365 より新しい印象を受ける。12 世紀末～13 世紀前半ごろとみておきたい。244 は灰釉陶器碗の底部。体部内外面の釉はツケガケによる。10 世紀前半ごろとみられる O53 窯式の製品で、土師器よりもはるかに古い資料である。

SK1358 (15-245～253) 完形品の土師器皿がまとまって出土した遺構である。245～250 は「て」字状口縁、251 は 2 段ナデ口縁の小皿である。246・247 は「て」字状口縁特有の屈曲があまくなっており、退化した段階のものである。252・253 は 1 段ナデ口縁の大皿であるが、器高が 4cm 程度と深身である。1 段ナデ面取り口縁・1 段ナデ口縁の皿がない点から判断して 12 世紀前半ごろと考えられるが、252・253 はこの時期のものとする違和感がある。類例がなく、現状では確実に位置づけがたい。

P1002 (15-254～275) ピット内に土師器が積み重ねられ、蓋をするように瓦器碗がかぶせられていた。254～274 は土師器皿。京都系土師器は 254～265・274 で、屈曲が不明瞭になった退化した段階の「て」字状口縁小皿（254～257）、2 段ナデ口縁大小皿（258～265）がある。274 は水平方向から面取りを施した 1 段ナデ口縁の大皿。274 はやや新しいタイプであるが、量的には 2 段ナデ口縁大小皿が主体となっている点からすれば、12 世紀初頭～前半ごろに位置づけられよう。275 は大和型瓦器碗。見込みは平行線状のヘラミガキを施し、体部内外面にも密なヘラミガキを施す。体部外面の分割ヘラミガキが高台付近までおよばない点からみて第 I 段階 D 型式で、11 世紀末～12 世紀前半と考えられる。

C. まとめ

東海地方の灰釉陶器や山茶碗をはじめ、讃岐産の須恵器、ロクロ成形土師器など各地の製品がもたらされていた点をもっとも注目される成果である。このような様相は宇治市街遺跡のみならず、南山城地域全体をみても例がない。11～12 世紀代の巨椋池・宇治川を利用した流通構造の一端を知る手がかりを得られた。一方で、平安京域特有の遺物の出土も確認され、京都と宇治のつながりの強さをあらためて認識させる結果となった。

また、10 世紀代の遺物が得られた点も大きい。これまでは平等院創建以前の時期の様相がほとんどわからなかっただけに、既往の宇治市地域の土器編年を再検討する良好な材料となろう。

第2節 SD2330 出土遺物の概要

宇治里尻 36 - 27 他の SD2330 において古墳時代中期の土器・木製品が一括で出土した。これらの遺物について、以下まとめる。

1. 土器（図面図版 21 ~ 23）

溝内で集中して出土しており、一括資料として扱えるものである。完形に復元できるものは少なく、多くが破片資料となる。土師器・韓式系軟質土器・須恵器で構成される 153 点の内、比較的残存状態の良い 76 点を図化し報告する。なお、個体数の計測は、以下の基準を設けて行った。

①全ての器種で、口縁端部を残し、端部幅 3cm以上の破片全てを 1 個体と認定する。

②高杯は杯部と柱状部の接合部を残すものも 1 個体と認定する。

ただし、韓式系軟質土器片と須恵器片は体部片でも特徴的な破片のため、1 個体として認定した。

180・181 は中型の直口壺である。181 は体部上端に口頸部を貼り付けており、内面に接合痕を残す。内面、外面はヨコナデによる調整を施す。外面には煤が付着する。

182 は大型の広口壺である。外反して開く口縁部を体部上端に貼付ける。口縁端部は外方に引き出し、内面にはヨコナデにより内傾面を作る。外面はタテハケによる調整を施した後に口縁端部にヨコナデを行い、内面の調整はヨコハケを施す。

183・184 は小型丸底壺である。体部は扁球形で、頸部はすぼまり、口縁部は上方へ立ち上がる。体部外面はヨコハケ・ナナメハケによって調整し、肩部内面はユビオサエを施す。183 の肩部には、布留式甕に見られる米粒状列点文が認められる。

185・191・192 は有段口縁壺である。185 は強く外反する口縁部をもち、口縁部中程に擬口縁を貼付ける。口縁端部は肥厚せず、丸くおさめる。口縁部内面、外面はヨコナデを行い、頸部内面はケズリを施す。191・192 は外反する頸部に擬口縁をつくり、口縁部を貼付けるもので、山陰に起源をもつと考えられる。191 の口縁端部は外側に引き出し、内傾面をつくる。192 の口縁端部は肥厚し、内傾面をもつ。体部外面はタテハケ・ヨコハケ調整、内面はケズリを施す。

186 は大型の直口壺で、器高 30.4cmとなる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は明確な面をもたずに丸くおさめる。体部は球形を呈し、底面は中央がわずかに窪んでいる。体部外面は上半部ナデ、下半部タテハケ、底部付近ではユビオサエを施す。内面は上半部ナナメハケとユビオサエ、下半部ナデを施す。体部上端に口頸部を貼り付ける。体部外面には全体的に煤が付着する。

187・188・189 は壺の底部である。187・189 は底面が平坦となり、188 は中央がわずかに窪む。187、188 の体部と底部の境にはユビオサエを施し、188 の内面はタテナデで調整する。

190 は有段口縁をもつ山陰を起源とする甕で、外反する頸部に直立する口縁部を付ける。口縁端部は肥厚し、内傾面をもつ。体部外面はナナメハケ・ヨコハケにより調整し、肩部付近のハケはヨコナデにより消される。内面はケズリを施す。体部外面には全体的に煤が付着する。

193 ~ 196 は口径 12cm程度の小型甕である。193 ~ 195 の口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は、193 は上方に尖っており、194・195 は外側に引き出して上方に平坦面を作り出す。196

は外反する口縁をもち、端部は外傾面を作り出す。193・195 は内面にヨコハケを施す。

甕は口縁部の形態から以下の A～C に分類でき、ほとんどの外面に煤が付着する。

A (197～201) は、口縁部が外反気味に立ち上がる甕である。197 の口縁端部は肥厚し、やや丸くおさめる。外面はタテハケ調整の後にヨコナデを施し、内面はヨコハケを施す。198 の口縁端部は上方へ引き上げる。外面はタテハケの後にヨコハケを施し、内面はナナメハケ・ヨコハケを施す。199 の口縁端部は、やや丸くおさめる。外面はタテハケの後にナデを施す。内面はナナメハケを施す。200 の口縁端部は肥厚し、やや丸くおさめる。体部は球形を呈する。口縁部は内外面ともヨコナデにより調整する。体部外面は全体的にタテハケで、肩部にはヨコハケを施す。内面はケズリを施す。体部上端に口頸部を貼り付けており、内面に接合痕を残す。201 は甕の体部で、やや球形を呈す。外面はタテハケ・ナナメハケ、内面はケズリを施す。

B (202～204) は、口縁部が直線的に立ち上がる甕である。202 は口縁端部上方に平坦面をつくり、口縁部外面はタテハケの後ヨコナデ、内面はナナメハケを施す。体部は外面にナナメハケ・タテハケ、内面にケズリを施す。203 の口縁端部はわずかに肥厚し、内側に丸くおさめる。外面はタテハケの後ヨコナデ、内面はナナメハケを施す。204 は他の甕と比べて器壁が厚く、口縁端部は上方につまみ上げて丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はケズリを施す。

C (205～208) は、口縁が直線的、または内湾して立ち上がり、口縁端部が内側に肥厚する布留式甕としての特徴をもつ甕である。205・206 は肥厚した部分を丸くおさめており、207・208 は肥厚した部分に内傾する平坦面をもつ。205 の口縁部外面はタテハケの後にヨコナデを施す。体部はやや球形を呈し、外面は全体的にタテハケを施す中で肩部はナナメハケを施す。内面はケズリ、ユビオサエを施す。208 の口縁部は内外面ともヨコナデ調整する。体部外面は全体的にナナメハケの中で肩部は横方向のハケを施す。内面はケズリを施す。

高杯は完形のものがなく、杯部と脚部の関係は窺えない。杯部は大きく無稜 (A・B)、碗形 (C)、有稜 (D・E) の 3 つに分類でき、無稜は口縁端部の形態、有稜は大きさから各々 2 つに分かれる。

A (209～212) は無稜高杯で、杯底部より続いて内湾気味に上外方へ開く口縁部をもち、口縁端部は外側に屈曲しておわる。口縁端部は、丸くおさめるもの (210・211) と、面をもつもの (209・212) がある。外面はまずタテハケにより調整し、その後にヨコナデを施す。

B (213・215～217) は無稜高杯で、杯底部より続いて内湾気味に上外方へ開く口縁部をもち、口縁端部は屈曲せずまっすぐおわる。215 の外面はタテハケの後ヨコナデを行い、217 の内面は放射状のヘラミガキを施す。213・215 の脚部との接合部分には刺突痕が認められる。なお、214 も無稜高杯だが、口縁端部の形状は不明。

C (218) は碗形高杯で、丸い杯底部より内湾してのびる口縁部を有し口縁端部は確認できないが、外側に拡張しておわると考えられる。外面調整は上半がナナメハケ、下半はタテハケを施す。

D (219) は有稜高杯で、杯底部は平たく、口縁部は屈曲して直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。外面はナデによって調整し、内面はヨコハケ・ナナメハケによる調整を施す。杯部と脚部の接合部には粘土塊充填の痕跡は認められるが、刺突痕は見られない。

E (220～222) は、口径 20cm を超える大型の有稜高杯で、杯底部は平たく、口縁は直線的にのび、深い杯部を呈する。口縁は外側に屈折しておわり、端部には明確な面をもつ。220 は底部で、外面に放射状のハケを施す。221・222 も、外面はタテハケの後にヨコナデを施す。

223 は杯部と脚部の接合部分であり、粘土塊充填の痕跡が確認できる。刺突痕は見られない。

224～246 は、高杯の脚部である。228～230・246 は裾部が緩やかに開き、226・231～238・242・243 は裾部が明瞭に屈曲する。224・225・227・239～241・244・245 は裾部の形状が不明。ほとんどが柱状部内面のシボリ痕をケズリによって消しているが、ユビオサエによって消すもの(232)や、シボリ痕を残したもの(235)も存在する。裾端部は、丸くおさめるもの(230・232・236)と、明確な面をもつもの(228・231・242～246)がある。228 は裾部径 12.4cm、脚部高 10.4cm の大型のもので、頂部には杯部と脚部の接合に関わる刻み目が放射状に認められる。裾部内面にはヨコハケを施す。230 は裾部がやや内湾気味に広がる。236 は外面にヨコハケとユビオサエを施す。239 は、4 方向から透孔を穿ち、杯部との接合部分に刺突痕が認められる。

247 は台付甕の台部である。端部は内傾する平坦面をもつ。内外面に調整痕は確認できない。

248・249 はミニチュア土器の鉢である。248 は底部から内湾気味に立ち上がり、頸部をわずかにすばめた後に外反する口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめる。底部は中央部を窪める。内外面ともにナデにより調整する。249 は手づくねで成形する。

250 は土師質の杯身で、体部が深く羽釜形を呈している。外面には上半部ナナメハケ、下半部タテハケを施す。土師質の杯身は他に類例が少なく、須恵器の器種を模倣したものと考えられる。型式としては ON 231 型式の杯身と似た形態となる。脚部が付く可能性も考えられる。

251～254 は、韓式系軟質土器である。251 は甕で、体部外面には磨耗のため観察しにくくなっているが、格子目タタキを施す。口縁は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部の内面は、ヨコナデにより調整し、体部上端に口頸部を貼り付けている。

252 は平底鉢である。平底の底部から内湾気味に立ち上がり、頸部をわずかにすばめた後に直立する口縁をもつ。外面はタテハケで調整し、内面はヨコナデ・ユビオサエを施す。

253・254 は外面にタタキ痕をもつ韓式系軟質土器片で、器種は不明である。253 は縄蓆文タタキ、254 は格子目タタキを施している。

255 は須恵器片で、器種は不明である。外面に平行タタキを施す。本資料唯一の須恵器となる。

以上、SD2330 出土の土器は、高杯を基準にして考えると幾つかの形態が認められるが、ほぼ同一時期の土器群として捉えることができる。器種ごとに見ると、甕では布留式甕の特徴である口縁端部の肥厚が認められるものが残っており、高杯では本格的に碗形高杯が導入されていない。時期としては布留様式が退化した古墳時代中期初頭となり、同時期の資料として、大阪市長原遺跡東部地区 SX701・702 や、本資料と同じ宇治市街遺跡内の他地点である宇治妙楽 55 SD302 出土土器などがあげられる。ただし、宇治妙楽 55 SD302 からは多くの韓式系軟質土器・須恵器が出土しているのに対し、本資料においては韓式系軟質土器 4 点、須恵器模倣土師器 1 点、須恵器 1 点しか出土しておらず、同じ遺跡内でも、土器総数に占める韓式系土器の比率という点で様相の違いが認められる。

また、本遺跡ではSD2330 出土土器と同時期の遺構はほとんど検出されていないが、わずかにP2060 と包含層から、同じ型式の土器が出土している（256 の高杯杯部、257 の高杯脚部）。このことから、同時期の生活空間である集落が近くに広がっていた可能性が想定できる。

2. 木製品（図面図版 24・25）

出土した木製品のうち、8 点を図示する。概要は、農耕土木具 1 点（258）、武器形 1 点（259）、紡織具 1 点（260）、刀剣装具 2 点（261,262）、雑具 1 点（263）、不明部材 2 点（264,265）である。明瞭な加工痕等が確認できるものは少ない。

258 は曲柄又鍬である。片方の刃部は欠損しているが、おおむね良好に残存している。全長 49.2cm、軸部長 14.5cm、刃部長 34.7cm、最大幅 17.3cm、最大厚 1.2cm を測る。柾目材を用い、樹種はアカガシ亜属である。着柄した様子や使用されたような痕跡は認められない。

259 は矢形である。矢柄部で折損しており全長は復元できない。残存長 26.5cm、鍬身部直径 1.5cm、矢柄部直径 0.8cm を測る。柾目材を用い、樹種はヒノキである。鍬身部の段差を作り出す際に刀子状の工具でケビキ線を施している。折損や土圧等の関係から、矢柄部はやや湾曲しているが、本来は直線的であったと考える。

260 は組み合わせ式糸巻の支え木である。中央で半割し、また支え木も欠損しているため全長は復元できない。残存長 12.6cm、最大幅 4.1cm、最大厚 1.3cm を測る。柾目材を用い、樹種はヒノキである。軸受部の接合部は 0.2cm 程度に薄く加工し、かつ中央に直径約 2.4cm に復元できる軸孔を穿孔している。

261・262 は剣鞘である。いずれも欠損しており、全長は復元できない。261 は残存長 23.5cm、最大幅 6.4cm、最大厚 1.5cm を測る。板目材を用いており、樹種はヒノキである。鞘尻部のみの出土であり、また内外面ともに一部炭化している。262 は残存長 76.0cm、最大幅 6.8cm、最大厚 2.1cm を測る。板目材を用い、樹種はヒノキである。鞘口の一部を欠損する以外は良好に残存するが、内面の削り込み等の加工は不明瞭である。

263 は机脚である。下端と裏面の一部を欠損しているものの良好に残存している。最大長 24.2cm、最大幅 9.0cm、最大厚 2.3cm を測る。板目材を用い、樹種はヒノキである。下部から上部に向かって厚みを増して作られており、蟻柄を用いて天板と結合したと考えることができる。

264・265 は用途不明品である。264 は残存長 13.6cm、残存幅 8.3cm、最大厚 4.3cm を測る。板目材を用い、樹種はヒノキである。裏面に刃部幅約 0.6cm の鑿を用いて浅い削り加工を施している。表面には黒色の塗料を塗布している。265 において削り取った槽口縁部の転用品であり、264,265 は同一固体と考えられるが接合関係は不明である。また転用後の用途も明らかではない。

265 は残存長 62.4cm、残存幅 8.8cm、最大厚 3.5cm を測る。板目材を用い、樹種はヒノキである。長辺に沿って 3 箇所約 2cm × 1.3cm の柄孔が穿孔され、そのうち 2 箇所に柄が残存している。槽の口縁部を削り取った底部を転用したものと考えられ、両短辺近くに確認できる加工は口縁部の削り取りの際のものである。

第V章 総括

以上、宇治里尻 36 - 6 他・宇治里尻 36 - 27 他で発掘調査した成果を述べてきた。これまで行われた宇治市街遺跡の調査面積としては最大であり、大きな成果をあげることができた。最後に調査成果を以下まとめる。

今回の発掘調査で検出した、調査区の中心を流れる東西方向の溝（SD1379・SD1380・SD1381・SD2152・SD2151・SD2150・SD2001）は、各溝より出土した遺物を総合して考えた結果、古代から近世にいたるまで、脈々と続いていたものであることが明らかとなった。

しかし、これだけの大規模な溝であるが、古代～中世にかけて文献などの記載はみあたらない。

日本書紀によれば、推古朝期（推古 15 年）の山背国栗隈大溝の記事があるが、この溝はいまだ確認されていない。今回検出した溝が栗隈大溝にあたるという確信はないが、この様な大溝の開削が 7 世紀各地で行われたいたことを物語る重要な資料といえよう。

また、11～12 世紀にはこの溝の役割は重要な位置を占めるようになる。そのことは、出土遺物からも推測される。出土している土器に摩滅が少ないという点、宇治で多く出土する遺物以外にも東海などの土器も出土する点などから、他地域からやってきた人々がこの溝を使用し、物資の流通などに使われていた可能性を示す。また、時期がはっきりしないが、溝の北側と南側に柵列（図面図版 6）を検出しており、この溝と生活の場が区切られた空間であったと考えることもできるのではないだろうか。

近世になって、この溝は井川と呼ばれるようになる。井川として文献に記載されるのは寛永 10 年の記事が最初である。この記事によると、この溝は井川として小倉の田畑を潤す用水路として機能し始めていると考えられる。

今回の調査で、宇治市街遺跡のなかでも今まで調査されていない南端部の調査となり、さらに地形的にも扇端部にあたる地形変換点での調査となった。宇治市街遺跡（宇治妙楽 55）の調査を皮切りに遺構面より下層の確認分析を行ったことで、縄文時代には宇治市街の扇状地の原形が形成されていたことも明らかとなってきた。これらの成果はこれまでの宇治市における発掘調査並びに遺跡の範囲を総合的に考える上でよいデータとなると考えることができる。

今後、宇治市における真摯な発掘調査によるさらなる成果が上がることを期待するものである。

表1 宇治市街遺跡(宇治里尻36-6他) 図面図版掲載遺物一覧表

遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
1	図11	土師器	皿	D7c	SD1379	12C後 ~13C	
2	図11	土師器	皿	D7c	SD1379		
3	図11	土師器	皿	D7c	SD1379		
4	図11	土師器	皿	D7c	SD1379		
5	図11	須恵器	杯身	D7d	SD1379	7C中	
6	図11	須恵器	杯身	C7	SD1379	8C後~9C	墨書
7	図11	瓦質土器	—	D7c	SD1379	—	
8	図11	土師器	高杯	D5d	SD1380北肩部	古墳中期	
9	図11	土師器	高杯	E5	SD1380北肩部	古墳中期	
10	図11	土師器	高杯	D5	SD1380北肩部	古墳中期	
11	図11	土師器	甕	F6c	SD1380北肩部	古墳中期	
12	図11	土師器	甕	D5a・D5b	SD1380北肩部	古墳中期	
13	図11	土師器	甕	F5b	SD1380北肩部	—	
14	図11	土師器	甕	D5a・D5b	SD1380北肩部	—	
15	図11	土師器	甕	F5c	SD1380北肩部	—	
16	図11	土師器	甕	D5a・D5b	SD1380北肩部	—	
17	図11	黒色土器?	甕	F5b	SD1380北肩部	—	
18	図11	須恵器	高杯	D6	SD1380精査中	5C末~6C	
19	図11	須恵器	長頸壺	F5b	SD1380(旧)北肩部	7C末~8C初	
20	図11	須恵器	杯蓋	B5	SD1380北肩部	7C中	
21	図11	須恵器	杯身	D5d	SD1380北肩部黒色土	7C中	
22	図11	須恵器	杯身	D5a・D5b	SD1380北肩部	7C末~8C初	
23	図11	須恵器	杯身	B5	SD1380北肩部	8C末~9C初	
24	図11	須恵器	杯蓋	B5	SD1380北肩部	8C末~9C初	
25	図11	須恵器	杯蓋	B5	SD1380北肩部	8C末~9C初	
26	図11	須恵器	壺	D5	SD1380北肩部	8C末~9C初	
27	図11	須恵器	壺	B5	SD1380北肩部	8C末~9C初	
28	図11	須恵器	鉢	E5	SD1380北肩部	10C後	雑産内巻きタイプ
29	図11	須恵器	鉢?	F5b	SD1380北肩部	10C末~11C	雑産
30	図11	土師器	皿	D5c	SD1380北肩部石敷直上 灰色シルト	10C後	
31	図11	土師器	皿	F5c	SD1380北肩部		
32	図11	土師器	皿	D5c	SD1380北肩部断削	11C	
33	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
34	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
35	図11	土師器	皿	E5	SD1380北肩部		
36	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
37	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
38	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
39	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
40	図11	土師器	皿	C5c	SD1380北肩部		
41	図11	土師器	皿	E5	SD1380北肩部		
42	図11	土師器	皿	A6	SD1380北肩部	11C後	
43	図11	土師器	皿	A6	SD1380北肩部		
44	図11	土師器	皿	F5c	SD1380北肩部		
45	図11	土師器	皿	E5	SD1380北肩部		
46	図11	土師器	皿	D5	SD1380北肩部		
47	図11	土師器	羽釜	F5a	SD1380(旧)北肩部	10C	摂津産
48	図11	土師器	羽釜	B5	SD1380北肩部	10C	摂津産
49	図11	黒色土器	碗	B5	SD1380北肩部	10C	A類
50	図11	黒色土器	碗	F5a	SD1380(旧)北肩部	10C	B類
51	図11	黒色土器	碗	B5	SD1380北肩部	10C	A類
52	図11	黒色土器	碗	B5	SD1380北肩部	10C	B類
53	図11	緑釉陶器	碗	F5a	SD1380(旧)北肩部	11C	近江産
54	図11	灰釉陶器	碗	F5a	SD1380(旧)北肩部	11C	VII期新~ VII期古・中 (尾野編年) 東濃産
55	図11	灰釉陶器	碗	F5b	SD1380北肩部	11C	VII期新~ VII期古・中 (尾野編年) 東濃産
56	図11	灰釉陶器	碗	B5	SD1380北肩部精査中	11C	VII期中 (尾野編年)
57	図11	須恵器	碗	F5b	SD1380(旧)北肩部	—	
58	図11	緑釉陶器?	碗	B5a-B5b	SD1380精査中	10C?	
59	図12	土師器	甕	B6	SD1380南肩部精査	古墳	
60	図12	土師器	甕	F6c	SD1380(旧)南肩部	古墳	
61	図12	須恵器	杯蓋	B6	SD1380南肩部精査	8C末~9C初	
62	図12	須恵器	杯蓋	B6	SD1380南肩部精査	古墳	
63	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380南肩部精査	古墳	
64	図12	土師器	杯身	B6	SD1380南肩部精査	7C末~8C初	
65	図12	須恵器	—	F6c	SD1380(旧)南肩部	—	
66	図12	須恵器	甕	B6	SD1380南肩部精査	古墳	

遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
67	図12	須恵器	鉢	B6	SD1380南肩部精査	10C末~11C	篠窯産外巻き つぶれタイプ
68	図12	須恵器	こね鉢	B6	SD1380南肩部精査	10C末~11C	東播系
69	図12	土師器	皿	F6c	SD1380(旧)南肩部	~ 12C前	
70	図12	土師器	皿	F6c	SD1380(旧)南肩部		
71	図12	土師器	台付皿	F6c	SD1380(旧)南肩部		
72	図12	土師器	—	B6	SD1380南肩部精査	—	墨書「大」
73	図12	土師器	皿	F6	SD1380底精査中	12C中	
74	図12	土師器	皿	F6	SD1380底精査中		
75	図12	土師器	皿	E6	SD1380底精査中		
76	図12	瓦器	皿	B6・C6	SD1380底精査中		11C末
77	図12	須恵器	鉢	F6	SD1380底精査中	11C	十瓶山産
78	図12	土師器	皿	B6・C6	SD1380底精査中	—	
79	図12	白磁	皿	F6	SD1380底精査中	10C~11C	XI類
80	図12	緑釉陶器	碗	B6・C6	SD1380底精査中	11C	近江産
81	図12	土師器	皿	A6・B6	SD1380(新)精査	12C?	
82	図12	白磁	碗	F6d	SD1380(新)	—	V類
83	図12	土師器	羽釜	A6・B6	SD1380(新)精査	—	
84	図12	—	土埴	A6・B6	SD1380(新)精査	—	須恵質
85	図12	銅製品	銭貨	B6a	SD1380(新)	和銅元年 (708)	「和同開珎」 708初鋳
86	図12	白磁	四耳壺	B6a	SD1380(新)	11C末~12C初	中国南方系
87	図12	土師器	壺	B6	SD1380(旧)砂礫層	古墳	
88	図12	土師器	高杯	B6	SD1380(旧)砂礫層	古墳	
89	図12	土師器	高杯	D6c	SD1380(旧)砂礫層	古墳	
90	図12	須恵器	杯蓋	B6	SD1380(旧)砂礫層	古墳	
91	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380(旧)砂礫層	古墳	
92	図12	須恵器	杯蓋	B6	SD1380(旧)砂礫層	7C末~8C初	
93	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380(旧)砂礫層	7C末~8C初	
94	図12	須恵器	杯蓋	B6	SD1380(旧)砂礫層	8C末~9C初	
95	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380(旧)砂礫層	8C末~9C初	
96	図12	須恵器	杯蓋	D6・E6	SD1380(旧)砂礫層	8C末~9C初	
97	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380(旧)砂礫層	8C末~9C初	
98	図12	須恵器	杯身	B6	SD1380(旧)砂礫層	8C末~9C初	
99	図12	須恵器	平瓶	B6	SD1380(旧)砂礫層	7C末~8C初	
100	図12	土師器	高杯	B6	SD1380(旧)砂礫層	—	
101	図12	土師器	鍋	B6	SD1380(旧)砂礫層	—	
102	図12	土師器	鉢	B6	SD1380(旧)砂礫層	8C	製埴土器?
103	図12	土師器	皿	B6	SD1380(新)砂礫層		
104	図12	土師器	皿	B6	SD1380(新)砂礫層	11C後 ~12C前	
105	図12	土師器	皿	D6	SD1380(新)砂礫層		
106	図12	土師器	皿	B6	SD1380(新)砂礫層		
107	図12	土師器	皿	B6	SD1380(新)砂礫層		
108	図12	土師器	皿	B6	SD1380(新)砂礫層		
109	図12	瓦器	碗	B6	SD1380(新)砂礫層		11C後
110	図12	須恵器	鉢	B6	SD1380(新)砂礫層	11C初	雑産外巻き タイプ
111	図12	山茶碗	小碗	B6	SD1380(新)砂礫層	11C末~12C初	3型式 (藤澤編年)
112	図12	—	土埴	D6	SD1380(新)砂礫層	—	土師質
113	図13	瓦器	碗	B6	SD1380(新)砂礫層重機	13C	橋梁型III-1
114	図13	瓦器	碗	B6	SD1380(新)砂礫層重機	12C前~中	橋梁型III-1~2
115	図13	瓦器	碗	B6	SD1380(新)砂礫層重機	12C前~中	大和型II-B
116	図13	瓦器	碗	B6	SD1380(新)砂礫層重機	11C末	大和型I-C 贈文に新旧様相
117	図13	白磁	碗	B6	SD1380(新)砂礫層重機	12C	IV類
118	図13	瓦質土器	鉢	B6	SD1380(新)砂礫層重機	—	
119	図13	瓦質土器	—	F6	SD1380(新)砂礫層重機	—	
120	図13	灰釉陶器	広口瓶?	D6・E6	SD1380(新)砂礫層重機	11C	VII期古・中 (尾野編年)
121	図13	灰釉陶器	碗	F6	SD1380(新)砂礫層重機	—	
122	図13	山茶碗	大碗	D6・E6	SD1380(新)砂礫層重機	11C末-12C初	3型式 (藤澤編年)
123	図13	土師器	鍋	F6	SD1380(新)砂礫層重機	—	表面にスス付着
124	図13	須恵器	こね鉢	D6・E6	SD1380(新)砂礫層重機	10C末~11C	東播系 古手の可能性
125	図13	須恵器	こね鉢	D6・E6	SD1380(新)砂礫層重機	10C末~11C	東播系 内面下部磨耗
126	図13	須恵器	すり鉢	B6	SD1380(新)砂礫層重機	10C末~11C	東播系 すり目あり
127	図13	土師器	皿	B6	SD1380(旧)砂礫層	12C後~	
128	図13	土師器	皿	B6	SD1380(旧)砂礫層	—	
129	図13	土師器	—	B6	SD1380(旧)	—	製埴土器?

遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考	遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考	
130	図13	土師器	高杯	B6	SD1380(旧)断割	12 C	白色土器	197	図14	土師器	皿	F4c	SK1365	12C後 ~13C前		
131	図13	土師器	—	C5	SD1380(旧)断割	—	製塩土器?	198	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
132	図13	土師器	甕	C5	SD1380(旧)断割	—	—	199	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
133	図13	瓦質土器	甕	D6・E6	SD1380(旧)	—	須惠器写し	200	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
134	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	12C後	—	201	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
135	図13	土師器	皿	F6c	SD1380南肩部断割	—	—	202	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
136	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	203	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
137	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	204	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
138	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	205	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
139	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	206	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
140	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	207	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
141	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	208	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
142	図13	土師器	皿	F6d	SD1380南肩部断割	—	—	209	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
143	図13	土師器	皿	F6	SD1380東西断割	12C中 ~後	—	210	図14	土師器	皿	F4c	SK1365			
144	図13	土師器	皿	F6	SD1380東西断割	—	—	211	図14	土師器	皿	F4c	SK1365		—	墨書「国口」
145	図13	土師器	皿	F6	SD1380東西断割	—	—	212	図14	瓦器	碗	F4c	SK1365		12C?	
146	図13	土師器	皿	F6	SD1380東西断割	—	—	213	図14	瓦器	碗	F4c	SK1365		12C後	大和型III-A?
147	図13	土師器	皿	E6d	SD1380断割	10C?	白色土器?	214	図14	白磁	碗	F4c	SK1365		12C	IV類
148	図13	土師器	皿	E6	SD1380断割	—	回転台・糸切り	215	図14	白磁?	皿	F4c	SK1365		—	
149	図13	土師器	皿	F6	SD1380東西断割	—	回転台・糸切り	216	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
150	図13	土師器	皿	E6	SD1380断割	—	回転台・糸切り	217	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
151	図13	瓦器	皿	F6	SD1380東西断割	—	—	218	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
152	図13	瓦器	碗	F6	SD1380東西断割	12C前	桶葉型I-3 ~II-1	219	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
153	図13	瓦器	碗	F6	SD1380東西断割	12C前	大和型I-b ~II-A	220	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
154	図13	瓦器	碗	G6	SD1380東側側溝	12C後~13C	大和型III	221	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
155	図13	白磁	碗	E5b	SD1380断割	—	—	222	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
156	図13	白磁	碗	F6	SD1380東西断割	—	—	223	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
157	図13	須惠器	甕	F6	SD1380東西断割	8~9 C	陶邑?	224	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
158	図13	須惠器	甕	F6	SD1380東西断割	8~9 C	瓦質焼成?	225	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
159	図13	灰輪陶器	碗	F6	SD1380南北断割	9C~10C	折戸10号築式 (檜嶋編年)	226	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
160	図13	灰輪陶器	鉢	F6	SD1380東西断割	11C末~12C初	VII期新 (尾野編年) 尾張産?	227	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
161	図13	瓦	軒丸瓦	C7	SD1380断割	12C	平等院 「NM048」同文	228	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
162	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382	12C中	—	229	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
163	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	230	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
164	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	231	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
165	図14	土師器	皿	E6c	SK1382		—	—	232	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385		
166	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	233	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385		
167	図14	土師器	皿	E6c	SK1382		—	—	234	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
168	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	235	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385		
169	図14	土師器	皿	E6c	SK1382		—	—	236	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
170	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	237	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
171	図14	土師器	皿	D6d・E6c	SK1382		—	—	238	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
172	図14	土師器	皿	E6c	SK1382		—	—	239	図14	土師器	皿	E4d	SK1385		
173	図14	黒色土器	碗	D6d・E6c	SK1382		10C	B類	240	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385		
174	図14	瓦器	碗	D6d・E6c	SK1382	12C前	大和型II-A	241	図14	土師器	皿	E4d・F4c	SK1385			
175	図14	須惠器	杯蓋	D6d・E6c	SK1382	7C中~後	—	242	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
176	図14	須惠器	杯身	E6c	SK1382	6C後	—	243	図14	土師器	皿	E4d	SK1385			
177	図14	須惠器	杯蓋	E6c	SK1382	8C末~9C初	転用硯か?	244	図14	灰輪陶器	碗	E4d・F4c	SK1385	11C	折戸53号築式 (檜嶋編年) VII期中 (尾野編年) 漫付か?	
178	図14	須惠器	杯身	D6d・E6c	SK1382	7C後~8C	—	245	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
179	図14	土師器	高杯	D6 d	SK1382	古墳中期	—	246	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
180	図14	土師器	皿	D6	SK1383	古墳中期	—	247	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
181	図14	土師器	皿	D6	SK1383	古墳中期	—	248	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
182	図14	土師器	高杯	D6c	SK1383	古墳中期	—	249	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
183	図14	土師器	高杯	D6c	SK1383	古墳中期	—	250	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
184	図14	土師器	高杯	D6c	SK1383 精査中	古墳中期	—	251	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
185	図14	土師器	高杯	D6c	SK1383	古墳中期	—	252	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
186	図14	土師器	甕	D6a	SK1383	古墳中期	—	253	図15	土師器	皿	D8c	SK1358			
187	図14	土師器	甕	D6c	SK1383	古墳中期	—	254	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
188	図14	須惠器	杯身	D6c	SK1383 底部	7C中~後	—	255	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
189	図14	須惠器	高杯	D6c	SK1383 底部	7C中~後	—	256	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
190	図14	土師器	—	D6・E6	SK1382・1383	—	—	257	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
191	図14	土師器	皿	D6	SK1382・1383	10C後	—	258	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
192	図14	土師器	皿	F4c	SK1365	12C後 ~13C前	—	259	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
193	図14	土師器	皿	F4c	SK1365		—	—	260	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
194	図14	土師器	皿	F4c	SK1365		—	—	261	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
195	図14	土師器	皿	F4c	SK1365		—	—	262	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
196	図14	土師器	皿	F4c	SK1365	13C?	—	263	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
								264	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
								265	図15	土師器	皿	C8c	P1002			
								266	図15	土師器	皿	C8c	P1002			

遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
267	図15	土師器	皿	C8c	P1002	11C末~12C初	
268	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
269	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
270	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
271	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
272	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
273	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
274	図15	土師器	皿	C8c	P1002		
275	図15	瓦器	碗	C8c	P1002	11C末~12C初	大和型Ⅰ-D
276	図15	土師器	皿	C3c	P1239	11C後~末	
277	図15	土師器	皿	C3c	P1239		
278	図15	土師器	皿	C3c	P1239		
279	図15	土師器	皿	C3c	P1239		
280	図15	黒色土器	碗	C3c	P1239		10C
281	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層	12C後~	
282	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
283	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 枠内下層		
284	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
285	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
286	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
287	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
288	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
289	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
290	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
291	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
292	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 枠内		
293	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
294	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 掘方		
295	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
296	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 掘方		
297	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
298	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 掘方		
299	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 掘方		
300	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
301	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
302	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
303	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 枠内		
304	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
305	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
306	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
307	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
308	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
309	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
310	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
311	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
312	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
313	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
314	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
315	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
316	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
317	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 底部		
318	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
319	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
320	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
321	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
322	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368		
323	図15	土師器	皿	D8c・D9a	SE1368 上層		
324	図15	土師器	台付皿	D8c・D9a	SE1368		
325	図15	土師器	羽釜	D8c・D9a	SE1368 上層	—	
326	図15	瓦器	皿	D8c・D9a	SE1368	—	
327	図15	瓦器	碗	D8c・D9a	SE1368	12C中 大和型Ⅱ-B	
328	図15	瓦器	碗	D8c・D9a	SE1368	12C後 大和型Ⅲ	
329	図15	瓦器	碗	D8c・D9a	SE1368	12C中 大和型Ⅱ-B	
330	図15	青磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
331	図15	白磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
332	図15	白磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
333	図15	白磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
334	図15	白磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
335	図15	白磁	碗	D8c・D9a	SE1368	—	
336	図15	須恵器	鉢	D8c・D9a	SE1368 枠内	11C?	東播系?
337	図15	—	土鍾	D8c・D9a	SE1368	—	須恵質
338	図16	土師器	皿	C4d	SE1225	11C後~末	
339	図16	土師器	皿	C4d	SE1225		

遺物番号	図面図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
340	図16	土師器	皿	C4d	SE1225 曲物内底部	11C後~末	
341	図16	土師器	皿	C4d	SE1225		
342	図16	土師器	皿	C4d	SE1225		
343	図16	土師器	皿	C4d	SE1225		
344	図16	土師器	皿	C4d	SE1225		
345	図16	土師器	羽釜	C4d	SE1225 曲物内底部	12C?	
346	図16	瓦器	碗	C4d	SE1225 曲物内底部	11C後	大和型Ⅰ-C
347	図16	土師器	皿	D9d	包含層	10C?	白色土器
348	図16	土師器	皿	B7c	SX1191	—	回転台
349	図16	土師器	皿	E6	SD1381	—	回転台
350	図16	土師器	皿	C4a	P1238	—	回転台
351	図16	土師器	皿	B7d	SX1191	—	回転台・系切り
352	図16	土師器	皿	D9a	包含層	—	回転台
353	図16	土師器	皿	B7d	SX1191	—	回転台
354	図16	土師器	皿	D8c・D9a	SD1179	—	漆付き
355	図16	土師器	皿	C8c	P1033	—	漆付き
356	図16	土師器	高杯	E2a	P1001	古墳	
357	図16	須恵器	高杯	B2d	包含層	古墳	
358	図16	須恵器	杯身	D8c・D8 d	土器集中部 断削	8C末~9C初	墨書
359	図16	須恵器	杯身	F3d	包含層	7C末~8C初	
360	図16	瓦質土器	香炉	E6a	SD1112	17C	
361	図16	土師器	—	G6	東側側溝	—	ミニチュア壺
362	図16	土師器	—	D8	包含層	—	
363	図16	土師器	—	D5a	重機掘削中	—	製塩土器?
364	図16	灰釉陶器	皿	E6	SD1381 断削	—	
365	図16	灰釉陶器	碗	D2・D3	遺構面精査中	11C中	百代寺窯式(檜崎編年)
366	図16	灰釉陶器	段皿	D2・D3	遺構面精査中	10C中	黒笹90号窯式(檜崎編年)
367	図16	灰釉陶器	碗	E6	SD1381	11C中	百代寺窯式(檜崎編年)
368	図16	灰釉陶器	小瓶?	F6	重機掘削中	—	
369	図16	青白磁	合子	B8d	P1013	—	
370	図16	白磁	皿	B8a・B8c	包含層	—	重ね焼跡あり
371	図16	緑釉陶器	碗	—	西側確認トレンチ中	—	
372	図16	緑釉陶器	手付瓶	G6	東側側溝掘削中	10C末~11C	VI期新~VII期古(尾野編年)
373	図16	陶器	おろし皿	—	重機掘削中	—	古瀬戸(檜崎編年)
374	図16	陶器	小皿	E8c	包含層	—	大塚II期(檜崎編年)
375	図16	石製品	—	B7d	SX1191	—	滑石製二次加工
376	図16	石製品	温石	B7d	遺構面精査中	—	滑石製二次加工
377	図16	石製品	—	B7d	SX1191	—	滑石製二次加工
378	図16	石製品	—	C7	SD1379・1381 断削中	—	滑石製
379	図16	石製品	—	C7	SD1379・1381 断削中	—	滑石製
380	図16	銅製品	銭貨	B7d	SX1191	北宋宝元2(1039)	「皇宋通宝」(1039 初跡)
381	図16	—	土鍾	A7	包含層	—	土師質
382	図16	瓦	軒丸瓦	C5	断削中	—	単弁蓮華文
383	図16	瓦	軒丸瓦	E8d	SD1005	12C	三巴文 均整唐草文 平等院「NH048」 同文
384	図16	瓦	軒平瓦	—	重機掘削中	12C	均整唐草文 平等院「NH049」 同文・ 向山瓦窯系
385	図16	瓦	軒平瓦	C7	SD1379・1381 断削中	12C	均整唐草文 平等院「NH049」 同文
386	図16	瓦	軒平瓦	B7c	SX1191	12C	連巴文 平等院「NH063」 同文・ 向山瓦窯系

表2 宇治市街遺跡（宇治里尻36-27他） 図面図版・写真図版掲載遺物一覧表

遺物番号	図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考	
1	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層	12C		
2	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層			
3	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層			
4	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層			
5	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層			
6	図17	土師器	皿	98C・10BC	SD2152上層			
7	図17	土師器	高杯	98C・10BC	SD2152上層	8C		
8	図17	土師器	—	98C	SD2152下層	—	墨書「九」	
9	図17	土師器	高杯	98C・10BC	SD2152下層	—		
10	図17	須恵器	杯蓋	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
11	図17	須恵器	杯蓋	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
12	図17	須恵器	杯蓋	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
13	図17	須恵器	杯身	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
14	図17	須恵器	杯身	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
15	図17	須恵器	杯身	98C・10BC	SD2152下層	7C中		
16	図17	須恵器	杯身	98C・10BC	SD2152下層	7C後		
17	図17	須恵器	杯身	98C・10BC	SD2152下層	7C中～後		
18	図17	土師器	皿	7C	SD2151上層	12C		
19	図17	土師器	皿	7C	SD2151上層			
20	図17	土師器	皿	7C	SD2151上層			
21	図17	白磁	碗	7C	SD2151上層		12C	
22	図17	土師器	高杯	7C	SD2151下層		8C後～9C中	
23	図17	土師器	高杯	7C	SD2151下層		9C	
24	図17	土師器	高杯	7C	SD2151下層	8C		
25	図17	土師器	—	7C	SD2151下層	—	製埴土器?	
26	図17	須恵器	高杯	7C	SD2151下層	5C末～6C		
27	図17	須恵器	杯身	7C	SD2151下層	8C		
28	図17	須恵器	高杯	7C	SD2151下層	8C		
29	図17	須恵器	杯身	7C	SD2151下層	8C		
30	図17	須恵器	杯身	7C	SD2151下層	8C?		
31	図17	須恵器	壺	7C	SD2151下層	8C		
32	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層	12C前		
33	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
34	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
35	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
36	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
37	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
38	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
39	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
40	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
41	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
42	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
43	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
44	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
45	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
46	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
47	図17	土師器	皿	7C	SD2150下層			
48	図17	土師器	台付皿	7C	SD2150下層			
49	図17	土師器	壺	7C	SD2150下層		8C後～9C	
50	図17	土師器	壺	7C	SD2150下層	9C		
51	図17	土師器	鉢?	7C	SD2150下層	—		
52	図17	瓦器	碗	7C	SD2150下層	12C中	大和型II-B	
53	図17	瓦器	碗	7C	SD2150下層	12C中	大和型II-B	
54	図17	瓦器	碗	7C	SD2150下層	12C前	橿葉型II-1	
55	図17	白磁	碗	7C	SD2150下層	12C	IV類	
56	図17	白磁	碗	7C	SD2150下層	12C	IV類	
57	図18	土師器	皿	11C	SD2030	12C後		
58	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
59	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
60	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
61	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
62	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
63	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
64	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
65	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
66	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
67	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
68	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
69	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
70	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
71	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
72	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
73	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
74	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
75	図18	土師器	皿	10C	SD2030	12C後		
76	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
77	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
78	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
79	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
80	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
81	図18	土師器	皿	11C	SD2030			
82	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
83	図18	土師器	皿	10C	SD2030			
84	図18	土師器	皿	10C	SD2030			回転台 ヘラ切り
85	図18	土師器	皿	10C	SD2030			回転台 糸切り
86	図18	土師器	皿	9C	SD2030			回転台 ヘラ切り
87	図18	土師器	台付皿	9C	SD2030			
88	図18	土師器	台付皿	9C	SD2030			
89	図18	土師器	高台付碗?	10C	SD2030			
90	図18	土師器	羽釜	9C	SD2030		—	
91	図18	土師器	羽釜	11C	SD2030		—	大和型
92	図18	土師器	羽釜	9C	SD2030		—	
93	図18	土師器	羽釜	10C	SD2030	—		
94	図18	瓦器	皿	9C	SD2030	—		
95	図18	瓦器	皿	10C	SD2030	—		
96	図18	瓦器	碗	9C	SD2030	12C中	橿葉型II-1～2	
97	図18	瓦質土器	—	11C	SD2030	—		
98	図18	須恵器	片口鉢	10C	SD2030	—	東播系	
99	図18	青磁	碗	11C	SD2030	—		
100	図18	白磁	碗	11C	SD2030	—		
101	図18	白磁	碗	10C	SD2030	—		
102	図18	白磁	皿	10C	SD2030	12C	IV-2 b類	
103	図18	白磁	碗	10C	SD2030	—		
104	図19	土師器	皿	6C	SK2393	12C前		
105	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
106	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
107	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
108	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
109	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
110	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
111	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
112	図19	土師器	皿	6C	SK2393			
113	図19	土師器	台付皿	6C	SK2393			
114	図19	瓦器	碗	6C	SK2393		12C前	橿葉型II-1
115	図19	白磁	碗	6C	SK2393	—	II類	
116	図19	土師器	皿	13B	SE2034	12C中		
117	図19	土師器	皿	13B	SE2034上層			
118	図19	土師器	皿	13B	SE2034下層			
119	図19	土師器	皿	13B	SE2034掘方下層			
120	図19	山茶碗	小碗	13B	SE2034掘方上層	12C中	4期 (藤澤編年)	
121	図19	土師器	皿	11C・12C	SE2195	12C中		
122	図19	土師器	皿	11C・12C	SE2195			
123	図19	土師器	皿	11C・12C	SE2195			
124	図19	土師器	台付皿	11C・12C	SE2195			
125	図19	土師器	皿	12B	SE2033 枠内	12C中		
126	図19	土師器	皿	12B	SE2033			
127	図19	土師器	皿	12B	SE2033 枠内			
128	図19	土師器	皿	12B	SE2041 曲物内			
129	図19	土師器	皿	12B	SE2041 曲物内	12C前		
130	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
131	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
132	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
133	図19	土師器	皿	11B	SE2032	12C		
134	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
135	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
136	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
137	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
138	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
139	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
140	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
141	図19	土師器	皿	11B	SE2032			
142	図19	土師器	皿	11B	SE2032			内面暗文状 墨書
143	図19	土師器	皿	11B	SE2032			回転台糸切り

遺物番号	図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
144	図19	土師器	皿	11B	SE2032	12C	回転台系切り
145	図19	白磁	皿	11B	SE2032	—	V類
146	図19	白磁	小碗	11B	SE2032	—	V類?
147	図19	白磁	碗	11B	SE2032	12C	IV類
148	図19	瓦器	碗	11B	SE2032	12C前	楕圓型 I-3~II-1
149	図19	瓦器	碗	11B	SE2032	12C前~中	大和型 II-A~B
150	図19	瓦器	碗	11B	SE2032	12C前~中	大和型 II-A~B
151	図19	須恵器	盤?	11B	SE2032	—	
152	図19	須恵器	甕	11B	SE2032	—	
153	図20	土師器	皿	6CD	SK2394	—	回転台ヘラ切り
154	図20	土師器	皿	10C	SX2036	—	回転台
155	図20	土師器	皿	2D	SK2326	—	回転台系切り
156	図20	土師器	皿	10C	SX2036	—	回転台系切り
157	図20	土師器	皿	10C	SX2036 東側	—	回転台系切り
158	図20	土師器	皿	2D	SK2326	—	回転台系切り
159	図20	土師器	皿	10C	SX2036	—	回転台系切り
160	図20	土師器	皿	10C	SX2036	—	回転台系切り
161	図20	土師器	皿	9C・10C	SD2002	—	回転台系切り
162	図20	土師器	皿	9C	SK2021	—	回転台系切り
163	図20	須恵器	壺	9C	SD2001 南肩	8C~9C	
164	図20	陶器	碗	—	—	近世	墨書
165	図20	灰釉陶器	—	14AB・15AD	SD2340(混入?)	12C	東山72号窯式
166	図20	山茶碗	小碗	10C	SX2036	11C末~12C初	3期(藤澤編年)
167	図20	山茶碗	小碗	10C	SX2036	12C中	4期(藤澤編年)
168	図20	山茶碗	大碗	11B	砂礫層包含層	12C中	4期(藤澤編年)
169	図20	石製品	石鍋	9C	SD2001 東側底	—	滑石
170	図20	白磁	碗	10C	砂礫層包含層	12C	IV類
171	図20	白磁	碗	10B	P2123	12C	IV類
172	図20	白磁	小碗	11B	P2075	—	
173	図20	白磁	碗	10C・11C	砂礫層包含層	—	重ね焼きの痕跡あり
174	図20	白磁	碗	13B	SK2331	—	
175	図20	瓦器	碗	16B	SK2365	12C	
176	図20	瓦器	碗	16B	SK2365	12C	
177	図20	瓦	軒平瓦	10B・11B・12B	SD2006 北側	—	
178	図20	瓦	軒平瓦	10B・11B・12B	砂礫層包含層	—	
179	図20	銅製品	銭貨	8C	SD2016	洪武元年(1368)	「洪武通宝」
180	図21	土師器	直口壺	12B	SD2330 ②・⑥	古墳中期	
181	図21	土師器	直口壺	13B	SD2330 南	古墳中期	
182	図21	土師器	広口壺	14B	SD2340 北	古墳中期	大型
183	図21	土師器	小型丸底壺	14AB・15AB	SD2340	古墳中期	米粒状列点文
184	図21	土師器	小型丸底壺	14A・15A	SD2350	古墳中期	
185	図21	土師器	有段口縁壺	14B	SD2330 ②, 南, アゼ	古墳中期	
186	図21	土師器	直口壺	14B	SD2330 ②, 南	古墳中期	大型
187	図21	土師器	壺	14AB・15AB	SD2340 南, SD2350	古墳中期	
188	図21	土師器	壺	14AB・15AB	SD2340	古墳中期	
189	図21	土師器	壺	14B	SD2330 アゼはずし中	古墳中期	

遺物番号	図版番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
190	図21	土師器	有段口縁壺	14B	SD2340 北	古墳中期	
191	図21	土師器	有段口縁壺	13B	SD2330 北	古墳中期	
192	図21	土師器	有段口縁壺	14B	SD2340 北	古墳中期	
193	図21	土師器	甕	13B	SD2330 北	古墳中期	小型
194	図21	土師器	甕	13B	SD2330 北	古墳中期	小型
195	図21	土師器	甕	13B	SD2330 北	古墳中期	小型
196	図21	土師器	甕	14B	SD2340 北	古墳中期	小型
197	図21	土師器	甕	14B	SD2330 ②	古墳中期	
198	図21	土師器	甕	13B・14B	SD2330 北, ⑥・⑦	古墳中期	
199	図21	土師器	甕	14B	SD2330 南	古墳中期	
200	図21	土師器	甕	13B	SD2330 北, ④	古墳中期	
201	図21	土師器	甕	13B	SD2330 ⑤	古墳中期	
202	図22	土師器	甕	14B	SD2330 南	古墳中期	
203	図22	土師器	甕	14B	SD2330 ⑦, 包含層	古墳中期	
204	図22	土師器	甕	14B	SD2330 南	古墳中期	
205	図22	土師器	甕	14B	SD2330 南, ⑨	古墳中期	口縁端部肥厚
206	図22	土師器	甕	14B	SD2330 南	古墳中期	口縁端部肥厚
207	図22	土師器	甕	13B	SD2330 ⑥	古墳中期	口縁端部肥厚
208	図22	土師器	甕	13B	SD2330 北, 南, ⑤・⑦	古墳中期	口縁端部肥厚
209	図22	土師器	無稜高杯	14B	SD2330 南	古墳中期	
210	図22	土師器	無稜高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	
211	図22	土師器	無稜高杯	13B・14B	SD2330 北, 南, ⑤・⑥	古墳中期	
212	図22	土師器	無稜高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
213	図22	土師器	無稜高杯	14B	SD2330 南	古墳中期	刺突痕
214	図22	土師器	無稜高杯	14B	SD2330 ⑦	古墳中期	
215	図22	土師器	無稜高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	刺突痕
216	図22	土師器	無稜高杯	13B・14B	SD2330 北, 南, アゼ	古墳中期	
217	図22	土師器	無稜高杯	13B	SD2330 ④・⑤	古墳中期	
218	図22	土師器	碗形高杯	14B	SD2330 アゼはずし中	古墳中期	刺突痕
219	図22	土師器	有稜高杯	13B・14AB	SD2330	古墳中期	
220	図22	土師器	有稜高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
221	図22	土師器	有稜高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
222	図22	土師器	有稜高杯	14B	SD2330 ②	古墳中期	
223	図22	土師器	高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	
224	図22	土師器	高杯	13B	SD2330 ④	古墳中期	
225	図22	土師器	高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	
226	図22	土師器	高杯	13B・14AB	SD2330	古墳中期	
227	図22	土師器	高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	
228	図22	土師器	高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	脚頂部に刻み目
229	図22	土師器	高杯	13B	SD2330 ④	古墳中期	
230	図22	土師器	高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	

遺物 番号	図版 番号	器種	器形	地区	遺構(出土状況)	時代	備考
231	図22 写20	土師器	高杯	13B	SD2330 ④	古墳中期	
232	図23 写20	土師器	高杯	14B	SD2330 ⑦	古墳中期	
233	図23 写20	土師器	高杯	14B	SD2330 アゼ	古墳中期	
234	図23	土師器	高杯	14B	SD2330 南	古墳中期	
235	図23 写20	土師器	高杯	14B	SD2340 北	古墳中期	
236	図23	土師器	高杯	14AB・15AB	SD2340	古墳中期	
237	図23	土師器	高杯	14AB	SD2340 南	古墳中期	
238	図23	土師器	高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
239	図23	土師器	高杯	14B	SD2330 南	古墳中期	4方向透孔 刺突痕
240	図23	土師器	高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
241	図23	土師器	高杯	14AB・15AB	SD2340	古墳中期	
242	図23	土師器	高杯	14B	SD2340 北	古墳中期	
243	図23	土師器	高杯	14B	SD2340 北	古墳中期	
244	図23	土師器	高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
245	図23	土師器	高杯	14AB	SD2340 南	古墳中期	
246	図23	土師器	高杯	13B	SD2330 北	古墳中期	
247	図23	土師器	台付蓋	14B	SD2340 北	古墳中期	
248	図23	ミニチュア土 器	鉢	16B	SD2392	古墳中期	
249	図23	ミニチュア土 器	鉢	14AB	SD2340 南	古墳中期	手づくね
250	図23 写18	土師器	杯身	14B	SD2340 北, SD2330 アゼは少し中	古墳中期	須恵器模倣 土師器
251	図23 写18	韓式系軟質 土器	甕	13B	SD2330 ⑤・⑥	古墳中期	格子目印き
252	図23 写18	韓式系軟質 土器	平底鉢	16A	SD2392	古墳中期	
253	図23	韓式系軟質 土器	—	13B	SD2330 北	古墳中期	格子目印き
254	図23	韓式系軟質 土器	—	16A	SD2392	古墳中期	縄痕文印き
255	図23	須恵器	—	14AB・15AB	SD2340	古墳中期	
256	図23 写20	土師器	高杯	12B	P2060	古墳中期	
257	図23 写20	土師器	高杯	—	包含層	古墳中期	脚頂部に刻み目 3方向透孔 刺突痕
258	図24 写22	木器	膝柄又楸	14B	SD2330 ⑦	古墳	
259	図24 写21	木器	矢形	14B	SD2330 南端アゼ	古墳	
260	図24 写21	木器	糸巻	13B・14AB	SD2330	古墳	組み合わせ式
261	図24 写21	木器	剣鞘	14B	SD2330 ⑦	古墳	一部炭化
262	図24 写21	木器	剣鞘	13B	SD2330 ⑥	古墳	
263	図25 写21	木器	机脚	13B・14AB	SD2330	古墳	
264	図25 写21	木器	部材	14B	SD2330 南	古墳	槽を転用 表面に黒色塗料
265	図25 写21	木器	部材	14B	SD2340 南	古墳	槽を転用 264と同一個体 か?